

浅野誠旅シリーズ4

全国各地 2003-2013

京都・滋賀 和歌山 岐阜・愛知 長野 金沢 東京
埼玉 北海道 四国（高知・愛媛・香川） 鹿児島
九州（北九州・長崎・宮崎）
付 ウィーン ドレスデン

2014年1月

はじめに

仕事で、全国各地を回ってきたが、近年は以前に比べたら、10分の1くらいの回数になっている。それでも、ここ10年間で20県近く訪問した。訪問したなかでブログや旧ホームページに記事掲載した17県を収録編集した。ちなみに、2009年に訪問した愛媛県で、47都道府県すべてを訪問したことになった。ほとんどが、研究会・学会・講演・ワークショップなどの仕事で訪問したところだ。

2006年までは頻繁に旅をしているが、「携帯」もデジカメも持っていなかったので、写真がないに等しい。そこで、文のみの記事もあるが、いくらか紹介した。また、ウィーン・ドレスデンにもでかけたが、海外シリーズに未収録なので、ここに付録として付けておいた。

目次

京都・滋賀	2013年3月、2012年12月・3月、2011年12月・4月	P 3
和歌山	2013年9月、2007年6-7月、2006年9月	P 3 2
岐阜・愛知	2011年3月、2006年3月、6月	P 4 1
長野	2013年9月、2007年5月、2006年3月、2004年10月	P 4 6
金沢	2011年9月	P 5 4
東京	2009年12月ほか	P 5 6
埼玉	2006年6月ほか	P 5 8
北海道	2003年12月	P 6 0
四国 (高知・愛媛2009年5月、香川2005年5月)		P 6 3
鹿児島	2012年3月、2010年11月、2010年6月、2010年3月、 2007年7月、2005年10月	P 6 7
九州 (北九州2008年9月、長崎2006年8月、 宮崎2006年7月、2005年10月)		P 8 3
付録		
ウィーン・ドレスデン	2005年3~4月	P 8 8

京都 ・ 滋賀

2013年3月



東寺の五重塔と満開のしだれ桜

28～29日京都に所用で出かけた。時間があったので、京都駅すぐ南にある東寺に出かけた。空海ゆかりの寺で、平安京当初の創建だ。五重塔が有名だ。京都は何十回と訪問し、そのたびに少しずつ重要ポイントを訪問してきたが、いくつか未訪問のところがある。その一つが東寺だ。京都駅からも見える五重塔は見ていたが、初訪問だった。

おりしも花見時だった。五重塔と桜のツーショットを何枚か撮影したので、紹介しよう。このしだれ桜は見事だ。寺の境内なので、花見宴会がないのがいい。

雪柳も美しく開花。その横には、亀の甲羅干し



伏見稲荷大社初訪問

想定外の山登り

29日、伏見稲荷大社に行く。





初訪問だ。京都は頻繁に行き、名所旧跡の主なところはほとんど回ったつもりだったが、寺院が中心で、神社はそれほど行っていない。

京都にいる娘の誘いで出掛ける。娘の知人の外国人はここが一番印象的だと語ったそうだ。私は、平地にある神社だと思い込んでおり、娘がペットボトルを買うので驚いた。

正面にある「本殿」めいたところは素通りして、奥へと進む。「本殿」あたりは、平日の朝なのに、たくさんの人出。さすが商売繁盛祈願などで著名な神社だと感

心する。外国人観光客が多いのは、さすが京都だと思う。

奥の方に行くと、完璧に山登りになる。所々、寄進による鳥居の連続。その近くに鳥居寄進代金一覧表があったりする。8万円から120万円まで。大きさによって異なるようだ。ここでも、さすが商売の神様だと感じる。

奥の山の頂上は「一の峰」だ。前ページ下の写真は、そこから、麓方向を見た写真。曇りがちで、麓はよく写っていないが、京都の街の南半分が良く見える。

上の写真は、その「一の峰」

上り下りに、しばしば寄進された鳥居のなかを通る。右写真

下に戻って、携帯電話についている万歩計を見ると、一万歩を越えていた。旅をすると、よく歩くのだが、今回もこれで満足した。





2012年12月

涉成園=枳穀邸

15～16日、京都の立命館（朱雀キャンパス）で開かれた、日本生活指導学会の研究会に参加した。15日、12時前に京都駅に着き、研究会開始前の「スキマ」の時間に、京都を歩いた。



まず駅前の東本願寺に行った後、徒歩5分足らずの涉成園=枳穀邸に行く。以前から話に聞いていた美しい庭園だ。

まだ紅葉が残っていたので、その写真を紹介することから始めよう。

この庭園は、P27から紹介する詩仙堂を作庭した石川丈山によるものだそうだ。

盛りを終えた紅葉だが、美しさをとどめている。



雲が立ち込め、時々小雨のあいにくの
天気で、庭園を楽しむのにふさわしくは
ない。にもかかわらず、さすが有名な庭
園だけのことはある。

このような庭園を仏教宗派の本山が持つ
ていると言うのに違和感を持つ人もいよう。

しかし、日本の仏教にはそうした所が多
い。それにしても、民衆宗教である浄土真
宗がもつというのに抵抗感を覚えることも
ありえよう。





それにしても立派な庭園だ。次回は、天気がいい時に訪問したいものだ。

入り口の受付で、県名と門徒であるかどうか尋ねられた。私の生家一帯は真宗だ。東本願寺なのか西本願寺なのかは覚えていない。そこで、「親の世代までは門徒だけど、私はアヤシイですね。」と微妙な答え方をしてしまった。

ところで、枳穀邸という別称の由来は、庭園のまわりにかたたち（枳穀）が植えられていたことにあるという。

京都駅から、徒歩10分ぐらいでいけるのだが、すいていた。オフシーズンだからだろう。一週間も前なら、紅葉が美しいので、にぎわったことだろう。



東本願寺 西本願寺

渉成園を後にして、東本願寺傍を通過して、西本願寺を見る。

左は最初に訪問した東本願寺



このページの写真3枚は西本願寺



この後、北方向に向かい、予約したホテルのある四条大宮へ。チェックインだけしてすぐに研究会場の立命館朱雀キャンパスへ。二条駅近くだ。

京都駅から徒歩にして、総計1万歩余りだった。途中の昼食時間を除くと、2時間足らず。

翌朝も、会開始前、三条付近の路地散歩を7000歩近くした。

以前からも、全国各地で所用がある際、会合の前後よく歩いたが、今回ほど歩くのは珍しい。京都の町並み、とくに路地を歩くのは結構いい気分だ。新旧の建物がいろいろあるし、知らなかった歴史記念物に出会うことも多い。

2012年3月

北野天満宮の梅



3月29日京都での所用があったついでに、翌30日、北野天満宮に出かけた。

今年は、桜の開花がまだだが、梅がいつもよりずっと遅くまで咲いており、天満宮の梅がまだ良い時期ということを知ったからだ。

20年以上前に訪問した時は季節が違おうし、夕時だったので、良い時期は初体験だ。

うわさ通り見事だ。

写真は、天満宮の建物と狛犬
大宰府に流された菅原道真と梅とのかかわりの歌「東風吹かば・・・」が有名だ。





境内の梅の写真を並べよう。

境内に沿って、秀吉の時代に、京都防衛のために築いた御土居が残っている。その近くにも梅林がある。(下写真)



右写真は、しだれ梅



旧平安閣の庭と 自転車の宅配便

京都では旧名平安閣で泊ったが、その庭園は評判とのことだ。

この日は、結婚式もあり、庭園で記念撮影が行われていた。

庭の楓の新芽がふきだしていた。



隣の御所には、珍しい実がついていた。近くの皇宮警察官に尋ねると、「せんだん」というが、「せんだんはふたば・・・」のせんだんとは違うと言う。

京都の街を歩いていると、自転車の宅配が、横で信号待ちをしている。許しを得て撮影した。なかなかいいことだと思う。電動自転車だが、自動車を減らす意味でも、また雰囲気的にもいい。このアイデアは広まってほしい。

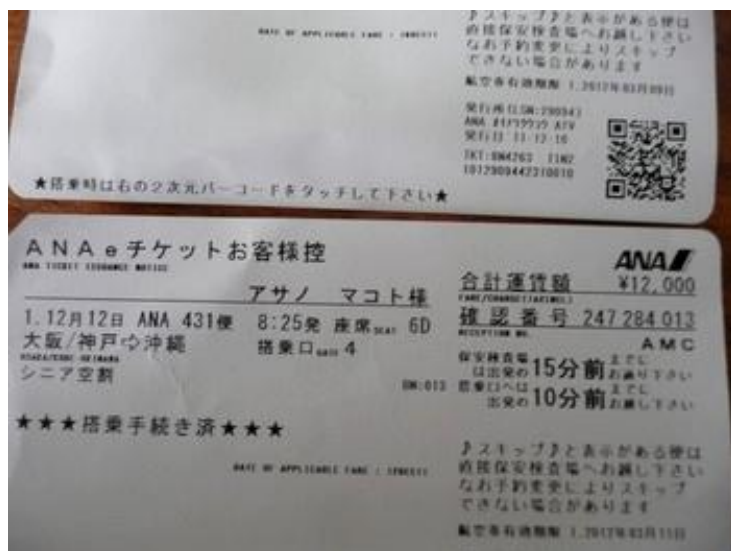


2011年12月

シニア空割

石山寺(大津在)の紅葉

所用で京都に出かけたが、その前に、大津にある石山寺を訪問した。



今回の飛行機は、初めてのシニア空割の利用。

65歳以上に適用される制度で、航空会社によって名称は異なるが、ANAの場合は、シニア空割。

知人から「有利さ」を聴いてはいたが、利用は今回が初めて。予約できないので、不安はあったが、価格の安さは魅力的。この時期は、全国どこでも12000円というのだ。

当日、空港に行き、空席があれば利用できる。ANAのクレジットカードをもっていれば、複雑な手続きは不要。空港カウンターの発券機にカードを差し込んで操作。通常の切符と同じことだ。私は初体験なので、職員に手伝ってもらったが、帰路はすべて自分でやった。

「空席がなかったら」という不安があるが、事前に調べておけばいい。今回、希望の帰便は満席だったので、翌朝便にした。

石山寺は初訪問だが、予定していたわけではなく、たまたま行きやすかったので、ブラッと訪問だ。事前に調べておけばよかったと思うが、ブラッと訪問もよい。歴史上名高い寺だ。閉門30分前だったので、ゆっくりできなかったのは残念だったが。

今年は、紅葉が遅いそうだ。そのために、京都の宿泊施設は満席状態らしい。





紅葉が、寺の風情とマッチしていい。



石山寺

石山寺は、奈良時代創建で、文学に関わりが深いということだ。左写真は、入り口にある東大門。重要文化財とのこと。

右は、石山寺の名前の由来である岩。
硅灰石で天然記念物とのこと。



左は、経蔵で、校倉造。フィンランドの
ログハウスも同じような組み方をしていた
のを思い出す。

琵琶湖畔の景観

大津市の琵琶湖畔に宿泊したが、朝は長時間の
湖畔散策をした。そのおりなどに撮った写真を紹
介しよう。

右は、対岸の比叡山。少し紅葉が残っている感
じだ。





左は、ホテルの窓からとった朝日。朝日は、鈴鹿の山々から出てくる。

右は、北北西方向。写真右側の遠方の山々には雪が見える。

立っている人は、釣り人だろう。



左は、湖岸にある、外来魚の『回収箱』。琵琶湖から外来魚を排除しようと言う動きのなかで設置されたようだ。魚釣りの人がたくさんいる。ボートに乗って湖面で釣る人もいた。

静かな湖面で、穏やかな釣りだ。



琵琶湖 船 ヨット

琵琶湖には、いろいろな船が浮かぶ。

一つは、1000トンぐらいの観光船。定期的に観光客を乗せる。

ヨットも多い。この日は、レースなのか練習なのか、たくさんのヨットがいた。カヌーや競技用のカッターなどもいた。日曜日のためか。琵琶湖周遊歌を思い出させる。

他に釣り船も多い。南端のこのあたりは見かけないが、漁船もいるだろう。



左写真は、ホテルから見た観光船。夜なので、露出時間が長く、手ぶれを起こしたが、その結果、「幽霊船」のように写ってしまった。これも面白いだろう。

2011年4月

会議のため京都に行く。
久しぶりだ。

会議の前後、京都散策する。
恵美子と一緒にだが、4日は娘が案内役だった。

美しさにたくさん出会ったので、珍しくたくさんデジカメ撮影する。撮影日は、4月3日と4日。



円山公園の桜



ちょうど花見時。寒さのため、平年より開花が遅れているとのこと。

京都の桜は、10年以上前に嵐山で見た。今回は、まず円山公園に行く。

予備知識はないが、写真の桜は有名ならしい。

まだ3分咲きと言ったところだが、桜の木の下は、青いビニールシートで埋め尽くされている。各シートの上に、一人二人と坐っている。

「いつから坐っているの」と尋ねると、23日からとのこと。私たちが訪問したのは3日の事だから、10日以上も場所取りをしているのだ。「いつ花見会をするの」と尋ねると、「5日」という。こうして、2週間近く交替で場所取りをしているのだ。



公園管理職員から、その場所は駄目だ、ということで、移動させられているグループもあった。

なんとも不思議な光景だ。たくさんの人が桜を賞しているのならともかく、ビニールシートと寒そうに防寒着にくるまり眠そうにしている若者は、風情がない。





桜以外にも美しい花・樹木があったので、撮影した。



紙製の帽子

円山公園に隣接する八坂神社境内を歩いていくと、出店が並ぶ。その一軒に、紙製の帽子を売っている店を見つけた。興味をそそられて、話し込む。店番をしている人自身が製作しているという。和紙に柿渋を塗って強くしている。洗濯もできると言う。軽いし、汗も吸ってくれる。店主は、紙製のズボンをはいているが、もう5年も着ているという。



気に入って、二人で買う。恵美子が、翌日飛行場で、「帽子がない」と叫びながら探している。なんと、彼女自身がかぶっている。かぶっているのを忘れたのだ。その位軽い。

価格は、手製なので、それ相応だ。

祇園白川の桜

京都には数十回行っているが、祇園は初めてだ。白川が祇園地域を通っているが、そこが祇園白川で花の名所なのだ。





ここは上品な雰囲気がある
200メートルぐらいの短い通りなのだが、風情
がある。





祇園白川の椿

桜は3～5分咲きだが、椿が満開だった。

修学院離宮界限

京都に詳しい娘と落ち合い。彼女の案内で歩く。
修学院離宮は予約制のため、次回にするが、周りを歩く。



離宮の周りに、畑が一杯残っていて、
感じがいい。

畑の奥に林丘寺という門跡寺院がある。そのあたりから京都の町並みを見る。



ろうばい

修学院離宮あたりから曼殊院に行く途中で、ろうばいの林を見つけた。これだけまとまって育っているろうばいを見るのは初めてだ。

曼殊院

曼殊院は初めての訪問。

写真は、通用口の庫裏で、重要文化財。
額には、「媚竈」(びそう)と書かれている。





立派な庭園だ。



曼殊院の庭園の桜



曼殊院を出た前の通りの垣根の新葉がきれいだった。

詩仙堂

美しいところということで、詩仙堂の名前は以前から何度も聞いていたが、初めての訪問。

期待通り。

入場料 500 円に、割安感を抱いてしまった。

まずは入り口の山門。小有洞というのだそう。





続いて、次の門。老梅関。

詩仙堂を作ったのは、戦国から江戸期にかけての、武将のち文人の石川丈山。愛知の安城出身だ。



建物から見た庭の光景。



小堀遠州?に代表される典型的な庭とは、
趣が異なるところがいい。

建物の縁側にサンダルがたくさん置かれて
いる。

庭散策自由ということらしい。早速庭に出
る。それまで、広い庭に一人だけだったが、
私がでたことがきっかけになったかどうかは
分からないが、何十人もが、散策を楽しみ始
める。



洗蒙瀑（蒙昧を洗い流すという意味だそうだ）
かわいい滝?だ。

僧都（ししおどし）

20, 30秒で水がたまり、美しい音を出す。





庭から建物を観る

庭が何段にもなっている。ここは、中段の庭というべきか。



別の角度から見た庭

小さな池 屋根がついている。そこに鯉が戯れる。



かたくり

多くの人になにげなく通り過ぎる。

この時期以降、山に入ると、ときどき群落に出会う。

愛知の足助の香嵐溪の山で、大きいものを観た記憶がある。

またもや、ろうばい
桜は少し早目だったが、ろうばいには恵まれた旅だった。

詩仙堂は、再訪の価値あり、と思う。



和歌山

2013年9月

和歌山城

9月6日、生活指導学会大会のある和歌山に行く。会議まで少し時間があつたので、博物館に行く。道案内板を見ていると、通行の方が声をかけてくれ、方向を教えて下さる。その後も、通行の方と声をかわす場面に何度か出会う。和歌山の方は、とても親切だという印象をもつ。



博物館は、模様替えのため、休館。隣の美術館で、地元出身画家の石垣栄太郎展を見る。なお、時間があつたので、美術館にいらっしゃる方に相談すると、すぐ隣の和歌山城を勧められる。和歌山城に登り、景観を楽しむ。

上の写真は天守閣からの景観。

左は城郭

右は、城内の庭園。

大阪から1時間の距離なのに、このゆったり感はなぜだろうか。





和歌山市内の熊野古道を歩く

この旅は実はマイレージを利用した旅で融通がききにくい
ため、学会が終わった8日に帰沖する航空券を予約できなかった。
そこで、9日午後の飛行機にのることになり、9日午前を
どうしようか、ということになった。

「わかやま市観光虎の巻」を参考に研究開始。和歌の浦や紀
三井寺に行くのが第一候補、加太海岸に行く案も浮上した。そ
して、どなたかが熊野古道をすすめた。和歌山市内にも古道が
あるのだ。

ホテルフロントで
相談。実に親切だ。
だが、この古道を歩
いた経験はないとの
ことで、素直に自信



なさそうな会話になった。どこでもそうだが、地元の方は、案外
地元の観光地を知らないことが多い。ここ沖縄、南城でもそうだ。

9日朝、ホテルに荷物を預けて、駅に向かう。古道に入るため
の最寄り駅は三つある。JR阪和線、JR和歌山線、和歌山電鉄
貴志川線の駅だ。その時間で最初に出発する電車は貴志川線なの
で、それに乗ることにした。猫のタマ駅長で売り出している。

乗ると、通学高校生が
一杯。伊太祈曽駅（右写
真）で降りる。かわいら

しい駅だ。駅前に「熊野古道」の看板がある（上写真）。

これはうまく行くと、思う。ところが、15分ほど苦勞。熊野古
道に入る案内板がない。おおよその方向を推理していく。そして、
出会った人に尋ねる。犬散歩中だったので、御存じだろうと、思い
きや、「わかりません」。

次に出会った方、しばし思案し、近くの人と相談し、教えて下さ
る。（後で、それは、古道が越える峠へ向かう道路だったことがわか
る）。そして歩いていき、これが古道だと思われる細道に入る。

田と集落と道路の現代風景なので、古道風景ではない。しばし、
歩くと「平尾王子跡」に到着。左写真は、そのあたりの古道風景だ。



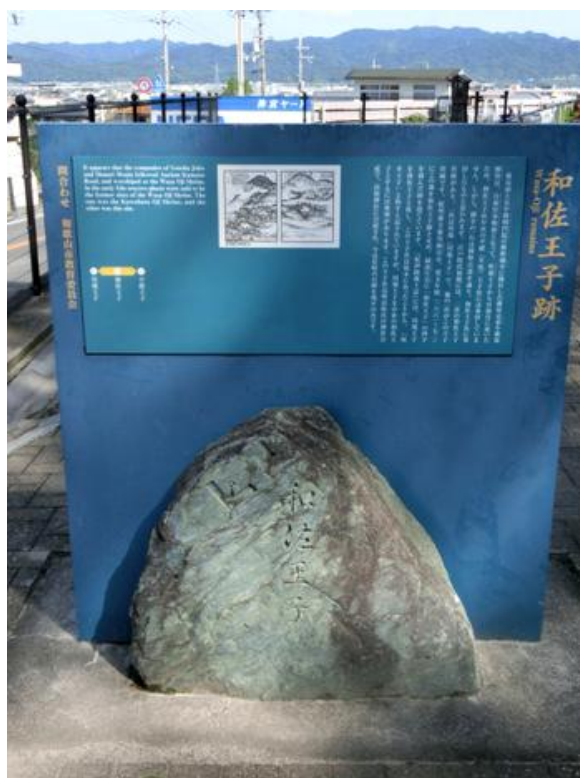
迷いながら古道を歩き始めたが、写真の「平緒王子跡」の案内板を見つけて、ほっとする。現在は一つの集落の中心あたりにある。その集落を通過すると、急な登りの道になり、二車線道路につながる。その脇のどこかに古道があるはずだが、見つけ切らずに、矢田峠のトンネルをくぐりぬける。



くぐりぬけると、見晴らしがよくなり、古道の案内板を見つける。中写真のような道をしばし歩くと、下写真のような和佐王子跡に着く。

そこで、トンネルではない古道の山道の案内図を見つける。どうやら私は、古道歩きを一般的な方向の逆から始めていたので、案内板を見つけにくかったようだ。

それでも、このあたりだと、古道的雰囲気味わう事ができる。





熊野古道の歴史は長い、このあたりだと、近世近代の香りに包まれ過ぎている。

左写真は、熊野古道沿いの旧庄屋の豪邸「旧中筋家住宅」 土日オープンなので、残念ながら見学できなかった。

右写真は、今回の旅の終点の布施屋駅前近くの街並みのなかを通る古道。

下写真は、その近くの川端王子の写真

熊野古道といっても、森の中ばかりでなく、実に多様である。今回は、平日の午前ということもあろうが、出会う旅行者はいなかった。でも、出会う地元の何人かの方に話しかけたが、みなさん気さくに応えて下さる。

こんないきあたりばったりの旅も面白い。



2007年6-7月

熊野

三泊四日で、恵美子とともに和歌山県に旅をしてきた。

最初は、南部（みなべ）で、卒業生4人と語った。南部というのは、南高梅の原産地・本場だ。

翌日から、熊野本宮にいる知人たちと出会い、熊野巡りをする。古道、本宮・新宮・那智の三社を含め、実にいろいろなところをゆったりとまわる。

熊野の旅への経路である南部（みなべ）で、出会った卒業生たちは、すべて琉球大学卒業で、私たちも含めて、沖縄出身の女性、沖縄婿の男性の3カップルということである。みなさん、学校現場では、中堅以上の位置にあり、しっかり仕事をしておられる。

昔話と現在の話、人生話など、実に多彩な話が展開した。

翌日は地域をいろいろと案内してくださった。この地域は、南高梅を育てることが中心産業となっており、あたり一面梅といってもいいくらいの光景である。ここにある南部農林高校でつくられた品種だから、南高梅というのである。

卒業生の一人も兼業で梅畑をやっている。自家製の梅をいただいた。このところ生産過剰で価格が下がり、農家は苦しい状況だという。

熊野詣の途中には、〇〇王子というのが、たくさんあるが、その一つの切目王子にもいく。

また、南方熊楠顕彰館も訪問する。

そして、熊野の絶好の案内書籍をいただき、熊野本宮へのショートカットの道案内もしてくれて、お別れする。

熊野の旅は、新しい発見がたくさんあった。

多様な訪問者を受け入れるところだ。男子禁制、女子禁制というところではない。また、多様な信仰をもつ人、もたない人も受け入れるところだ。

そしてまた、熊野は多様な神々が「共生」「共存」「共在」するところでもある。その神々をめぐる、時の権力が支配統制をしたり、また、民衆規模での「ブーム」が起きたりもしてきたところだ。そのなかで、ときには、「神々の争い」も起きているようだが。

それらは、沖縄における神々、神々への権力による支配統制、神々への民衆の対応と、似たところが多くある。補陀落信仰のように、沖縄との結びつきを感じさせるものもある。





熊野古道と王子

前ページ写真の古道は猪鼻王子から発心門王子への古道だ。ここが、私のはじめて歩いた古道となる。

静かな落ち着いた古道で、古道らしい雰囲気をもっている。

上写真は水呑王子

詣の方の水呑場というのが、右に写っている。王子というのは、熊野までの途中に建てられた祈りの場である。私が訪問した王子は、切目、発心門、水呑、伏拝、湯峯、浜の宮である。

右写真は、水呑王子から伏拝王子への古道である。熊野はもともとは照葉樹林でおおわれていたようだが、近年の植林で、杉・檜が大部分になってしまったとのこと。この旅で、古木への関心が高まったが、神社には古木がたくさん残されている。南方熊楠は、そうした古木を含む自然を残す意味でも、あるいは民衆の長い生活の場と結びついた祈りの場を残す意味でも、それらを合祀しようとする政府の政策に激しく抵抗した。



伏拝王子から大高原をのぞむ

中辺路を通って伏拝王子に着いて、目的地の旧本宮のある大斎原をのぞむことができる。写真中央のくぼんだあたりである。



七越から熊野川をのぞむ

本宮大社の対岸の急峻な山「七越」から見ている。ここは、修験道の人たちの参道の起点近くでもあ



る。明治期にこの熊野川が氾濫して、写真中央右手の川沿いの森のように見える本宮が、写真からはみ出している右側に移転したというのだ。



一遍の碑

旧本宮跡にある一遍の碑である。この地で、一遍はバージョンアップして、全国行脚し、踊り念仏ともいわれる民衆宗教を広めていった。沖縄のエイサーも関連するとの説を聞いたことがある。

神倉神社

新宮の古宮である神倉神社は、かなり古い信仰を示す。巨岩信仰である。著名な巨岩の横に、岩に囲まれた場がある。何か神聖なものに包まれている雰囲気強く感じる。





補陀落信仰

那智大社に入っていく海岸近くに、補陀落神社がある。その倉庫に復元された写真の船がある。僧侶が生きながら、この船に入り、浄土の補陀落をめざして海に出るのである。生存する可能性はほぼない。まれに沖縄に着き、熊野信仰を伝えたとの話がある。金武がその一つである。

ニライカナイ信仰と共通する世界をもっている。私が沖縄史を調べている際に、この話に行きあたり、熊野に関心をもつ一つのきっかけをつくった。



那智瀧

那智大社から瀧をのぞむ。左側は青岸渡寺。下は、瀧を写すNHKの常設カメラだ。よくニュース番組などで登場する。

瀧の際までいったが、ここからの光景がいい。ここには、数年前、同僚たちとでかけたことがあって、2回目だ。

南方熊楠記念館

白浜にあるこの記念館は、熊楠についてよくわかる所である。記念館の玄関からアプローチを写した。

ここは亜熱帯に近い気候で、沖縄と植生が似ている。

熊楠はいろいろな面で大変興味深い人だ。



2006年8月

高野山

8月31日恵美子とともに高野山に行く。電車とケーブルカーで行ったのだが、ずいぶんと高いところまで行くので驚いた。標高1000m近くである。そして、その山内の広大な敷地に多くの建物などが並ぶ。1000年以上前の建設であるが、おそらく天皇家からの大規模なサポートによってつくられたのだろう。とすると、当時の民衆にとっては、どういうものであったろうか。中国から導入した密教を軸にするものだけに、当時の民衆信仰とのかかわりはどうだったのだろうか。

これだけの山中だけに、強い霊性を感じる。宿坊に宿泊したのだが、翌朝、読経、護摩の儀式を見る。護摩を直接見るのは初めてである。奥の院に向う道の両側に建てられた歴史のある墓。大名や天皇家をはじめとする各時代の権力者たちの墓が圧倒する。

そうした面と、四国八十八箇所めぐりに象徴され、弘法様として慕われてきた流れなど、民衆レベルにまでの広がりも注目される。それはとくに今日盛んであるようだ。

本土では「自然に包まれる」という感覚であるのに対し、沖縄は「自然に開かれる」という感覚のなかで、霊性がとらえられるかもしれない、と恵美子と会話した。

この大規模な「霊場」は、今日では観光で支えられる面が強いようだ。私たちが宿坊をインターネット予約したことや、宿泊した宿坊には外国人団体がいたこともそれを示唆しているようだ。

今回の旅は、計画なしに高野山にいき、最近空海にはまっている恵美子の関心をもとに歩いた。そして、「感じる」ことを大切に。かつての私の旅行は計画をきちんとたてて「合理的」に動いたのだが、だんだん流れに任せる旅をするようになった。

岐阜・愛知

2011年3月

岐阜城 長良川

父の7回忌で、岐阜に行く。それに合わせて、3世代の家族が、長良川沿いに集合。

何年ぶりかに、ロープウェイで岐阜城に行く。小学生だったか中学生だったか忘れたが、徒歩30分で登った記憶がある。



岐阜城から、眼下に長良川を見下ろす。

左は、下流方向を見る。この方向で、南の木曾川とはさまれたところが、私の生まれ育った所だ。

右は、城の真下だ。

小学生時代、泳いだ。花火大会を見に来た記憶もある。

このあたりは鶴飼の場所でもある。

河口堰は別にして、ダムがない川で、清流として知られている。中流から下流となるこのあたりでも、結構きれいだ。





岐阜公園 木の芽田楽 板垣退助銅像

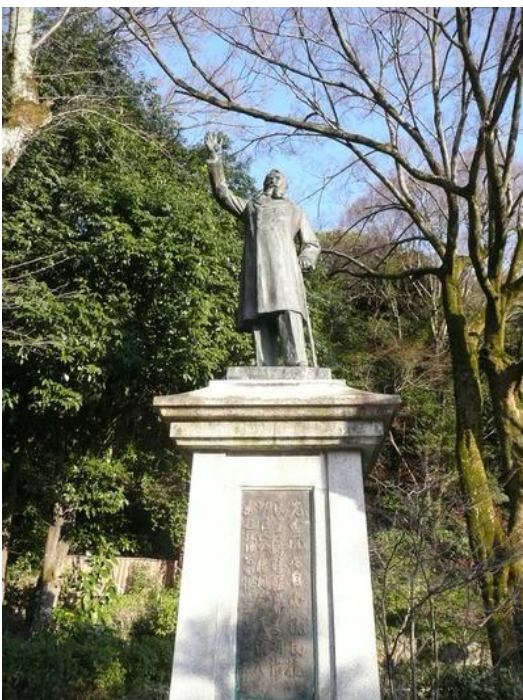
岐阜城の麓にある岐阜公園。この周辺がかつての岐阜の中心。城下町だ。戦国時代に栄えたところだ。

私の個人体験では、小学校時代の写生大会会場だったことを記憶している。

桜が咲きかけていた。ソメイヨシノはまだだったが、種類によっては満開状態。

今年は、寒くて、全体に例年より開花が遅れている。

公園の茶屋で、木の芽田楽を食べる。子どものころだったか、青年時代だったか、食べた懐かしい思い出。このあたりの茶屋は歴史が長い。豆腐に味噌だれがかけてある。



『板垣死すとも自由は死せず』で有名な板垣退助の銅像もある。もともと、彼はここでは死なず、後までいろいろと活躍したという話だが。

長良川、揖斐川、木曾川を、この地方では三川と呼び、川と水との「付き合い」の歴史が描かれてきた。

川がもたらす栄養豊かな土が、米作を中心とする農業基盤を作り、新田開発が、とくに近世期に進んだ。とはいえ、その豊かな土は、洪水によってもたらされた。だから、洪水をコントロールすることが、農業および人々の生活の持続にとって必須であった。その知恵として、耕地と集落を堤防で囲む輪中が形成され、私の出身地は、その輪中地帯だった。



江戸前期、その輪中維持のために、下流で合流して洪水を頻繁に起こす、三つの川を分ける大土木工事を、幕府は薩摩藩に命じた。それで、薩摩藩は経済的に苦境に陥るのだが、それを奄美・沖縄からのサトウキビ生産収益によってカバーしたのだ。



宿泊した宿の入り口には、洪水の際の水位が示されている。これらの中には、私の記憶にも鮮明なものがある。

このあたりのどこからでも、伊吹山が良く見える。かなり遅くまで冠雪が見られる。私にとっても、幼少期、青少年期の思い出の山だ。

長良川堤の桜は有名だが、この写真を写した4月1日には、まだ咲き始めであった。しかし、左下写真の『鶴飼桜』は満開だった。



ツインタワーから見た名古屋

岐阜からの帰り道、名古屋駅のツインタワーの51階から、名古屋を眺める。最近、目の前にトヨタの建物（写真左）ができて、視野が少し狭くなったが、南東方向を見る。この方向の先に、私たちが10数年間すんだ日進市赤池がある。

このツインタワーは、岐阜城からも見えた。



2006年3、6月

愛知

2004年8月まで住み、その後も2、3年ほど、集中講義などもあって、頻繁に出かけた愛知だが、愛知に関わって書いた記事を二つ紹介しておこう。

沖縄料理店の変化（2006年6月9日）

6月4日のワークショップの後、参加者の方々と近くの沖縄料理店に入る。まだ開店まもない店である。かつての本土の沖縄料理店とはずいぶん変わったという印象である。

まずもって、「アカヌケ」している。メニューをみて、やっとここは沖縄料理店なんだな、と納得できる感じである。来客はウチナンチュではなく、沖縄に関心をもつ人、沖縄旅行をした人だろう。でてくる料理も、沖縄で食べる感じとは異なり、客層に合わせて、ヤマト風を感じる。途中で若い従業員によるエイサーの小出しがあるが、私には沖縄を感じにくい。

こんな感覚をもって、沖縄観光客は沖縄にくるのだろうと思われる。そんな意味では、複雑な気持ちにな

る。ついでながら、島ラッキョーは、当然のことながら、玉城で食べるのと価格上ほぼ10倍の違いがある。粒の大きさも我が畑の1/3くらいだ。

逆に、私がどこかの郷土料理店に入ったとして、そこでの雰囲気・食事について、その郷土出身の人は同じように感じるのだろうか。そのあたりはわからない。

このところ、沖縄でも含めて、飲み屋やこんな感じの店に入ることがめったにない私が書くのだから、あてにならない話だろう。

近頃の私の旅風景（2006年3月25日）

中京大学の隔週講義が終了したので、このごろの私の旅は、同じところにでかける形はなくなり、毎回、異なるところへの旅となる。そこで、毎回異なる新鮮な出会いとなる。それには、旅先の地域ということだけでなく、出会う人々、人々の活動との出会いが含まれる。

今回の20～23日の旅も、大阪・四日市・名古屋という組み合わせで、出会いも豊かであった。旅の途中、列車や飛行機のなかでは、終了した出会いを思い起こしながらメモ書きをする。そのメモを帰宅後、ホームページに掲載する随想にしているのだ。文献読みとならんで、こうした旅が私の研究生活と人間生活の「資源」となっているのである。

旅となると、これまで食べ過ぎ・飲み過ぎの傾向があり、帰宅後の体重計は1～2kg増を示す。それはおいしいものに出会うことと、人々の出会いが酒によって深まること、菜食的な日常生活に比べてカロリーの高いものを食べることになることなどによろう。ただ、以前に比べて、食べ過ぎ・飲み過ぎ傾向は少なくなり、このごろでは1kg以下の増にとどまっている。

旅生活は、都市生活とイコールになるので、お金を使わざるをえないことが多い。そんなことで、私の支出は、通常の生活の10倍くらいになる。それが頭の痛いところである。そんな旅の途中で時間が空いたら、書店によって本購入することも支出増の一因であろう。

長野

2013年9月

福沢桃介記念館

和歌山で開かれた日本生活指導学会参加の前に、久しぶりに岐阜の実家訪問、愛知の旧我が家訪問、そして木曽散策をした。

木曽では、南木曽（なぎそ）の柿其（かきぞれ）温泉周辺のハイキングが目的だったが、天候がハイキング向きではなかったため、最初に下車した南木曽駅近くの福沢桃介記念館に行く。福沢諭吉の娘と結婚し福沢を名乗った実業家だ。現在の関西電力・中部電力の前身の電力会社などの社長を務めた。このあたりの水力発電開発を行った辣腕の人だ。

彼の別荘が凄い。それが記念館になっている。300円の入館料だが、すごく丁寧な説明を全館でもらう。私たちの他に訪問者はいない。

家の周囲には流されてきた巨石が今でもごろごろしているなか、土石流にも耐えて残った建物。書斎のある東側から撮影。



左写真は、書斎内部。あこがれる部屋だ。

桃介橋

すぐ近くを流れる木曾川には、「桃介橋」という吊り橋がかかり、渡ることができる。このあたりは、木曾川が上流域から中流域に移るあたりだ。下流域には、私の実家がある。

歩いて通ると、吊り橋なので当然揺れる。



南木曾中学校

桃介記念館の向かい側には、南木曾中学校がある。垢抜けした美しい校舎だ。通いたくなる学校。

15年前に、学生を連れて、この近くの上松小学校を訪問したが、ここは総檜造りの立派な学校だ。自然と木材が宝の地域なのだ。





妻籠

この後、妻籠を訪問する。ここも10数年ぶりの訪問だ。(もしかすると、10年ほど前に訪問したかもしれないが、記憶が薄れている)

以前と変わらず、美しい街並みだ。

妻籠では、博物館風になっている脇本陣に入る。右写真は、脇本陣前。



左写真は、脇本陣のいろり風景。

私自身は、何度目かの訪問だ。脇本陣そのものは以前と変わらないが、裏手に歴史資料館が新設されており、このあたりの歴史的事情がよくわかる。

柿其溪谷

妻籠から、その日に宿泊する柿其溪谷の「いち川」に行く。

到着後、柿其溪谷を散策。このあたりの木曾川に注ぐ支流は、一つひとつが素晴らしい溪谷美を見せる。

右写真は、つり橋。風情がある。



左写真は、「牛ヶ滝」絶景だ。散策路が崩れて通行止めで、迂回路を歩く。森の険しい道で、滝を見る絶好の場に行きつく。途中、誰にも会わない。

動物に出会ったらどうしようか、と思いながら歩く。旅館で聞いたら、シカ、イノシシ、熊がいるそうだ。旅館近くの田畑には、動物除けの電線が張ってあったから、本当にいるようだ。翌日の散策には、シカらしい糞を見つけた。

右写真は、恋路峠から、中山道野尻宿の集落を見る。向こうは、南アルプスの山々。





左写真は、峠に置かれた道祖神。新しいものだろう。

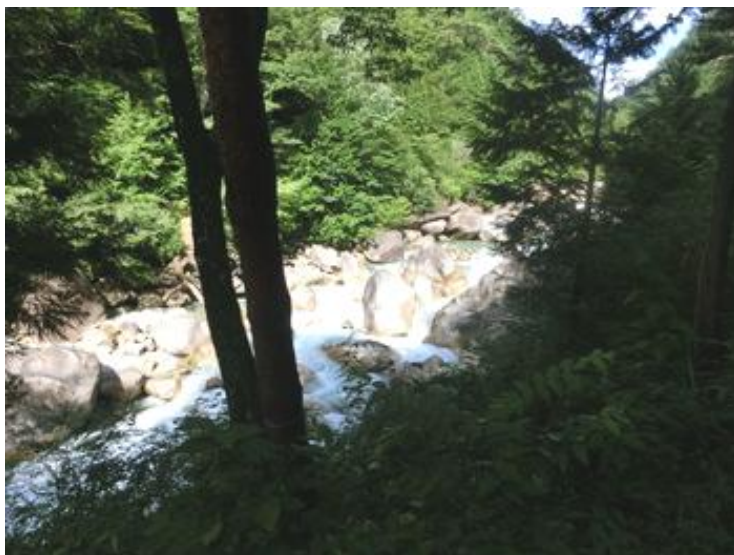
阿寺溪谷

翌朝、柿其から恋路峠を越えて、阿寺溪

谷入り口を通過して野尻駅まで歩く。

阿寺溪谷にも行きたかった。特急のとまらない野尻駅では、次の列車は2時間後で、その日の到着地の和歌山の会議に間に合わない。

そこで、右の写真をとって、引き返す。野尻は、10年以上前、知人宅に泊まって、地域の教師たちと語り合った思い出がある。中山道の宿場町だが、妻籠のように、観光資源になる街並みが残っていない。



野尻駅

駅は、大桑村に委託して発券業務をしている。午前中だけだが、元JR職員の方がしている。ここから和

歌山までの切符と新幹線そして紀勢線の特急券を買う。50年近く前、東京→信越→中央→東海道→東京という手書き切符を買ったことを思い出す。

駅前に高齢者が何人かおられたので、話しかけると、病院と買物にでかけるための送迎バスを待っておられるとの事。旅先に出ると、だれでも話しかける癖が、拡大する。とくに同世代は話しかけやすい。

駅の横には、山から切り出された材木が山積みされている。かつては、林業で栄えたところのようだ。



2007年5月

白馬

連休に、北アルプスの白馬にでかけた。写真は、朝9時ごろゴンドラ・リフトを3つ乗り継いでいった、標高1700メートル付近からの白馬三山である。（右写真）

あたりはスキー・スノーボード・登山の方々でいっぱいであったが、私達のように散策風の方もかなりおられた。



雪のあるところに行く計画ではなかったので、ここどまりであったが、快晴のもと、とてもステキな景観に恵まれた。

白馬へはほぼ10年ぶりである。学生たちとゼミ合宿ででかけて以来で、泊まったペンションはすぐ近くであった。

白馬の南の青木湖近くに姫川源流というのがある。日本海に注ぎでる姫川のまさしく源流の泉が、この写真である。国道のすぐ近くで源流が見られるというのはここしかない、とのこと。（左写真）



右写真は、親海湿原のカタクリの花。群生を見るのは、10年以上前に愛知県足助で見て以来である。連休時期、芽吹き・開花から新緑への季節である。





左は親海湿原で撮った。水芭蕉は有名だが、美しい開花に出会うのは、なかなか難しい。

写真をとったのは5月4日。白馬のあちこちで桜が満開。中写真は、そのなかの一本。



白馬まで車でいったが、長距離運転は久しぶりであった。渋滞もあり苦労したが、カーナビに助けられもした。

数年前、連続運転は1時間が限界だったが、今回は2時間高速道路運転もしたが、疲れを感じないので、私の健康度がすごく良くなったなあ、と実感した。

最初は、愛知式運転の他の車に合わせるのに苦労したが、そのうちに慣れ、愛知式を思い出した。それでも、最後あたりは、沖縄式運転に合わせなくてはと思い、スロー運転で、どんどん抜いてもらった。沖縄に帰ると、やはりスローな沖縄式運転に戻っていた。

※ 2007年2月のブログスタート以前にも何回か長野を訪問し、当時のホームページの随想欄に書いたことがある。次の2点を掲載しておこう。残念ながら、掲載できる写真はない。

長野の旅（2006年3月3日）

3月1日の長野大学のワークショップで、今年も長野を訪れることとなった。長野にはここ10年以上ほぼ毎年2回ほど訪問している。広い長野もこうしてしばしば訪れると、リピート訪問となる地域が多い。今回の上田・塩田地域も通算3回目となる。ワークショップの晩は、別所温泉で懇親会となった。その上松旅

館は2回目である。夜、雪が降り始め、翌朝の露天風呂は雪景色のなかで気分がいい。

午前中2時間ほど長野大学の先生に、前山寺、無言館を案内していただく。前山寺の三重の塔はなかなかのものである。屋根の曲線が気に入った。このあたりは、平安から戦国にかけて歴史の大きな焦点となったところである。江戸幕府支配の跡が目立つ地域が多いなかで、その前の時代が目立つという点で興味深い。

前回の訪問では、別所温泉付近および上田で、山本宣治の碑とか、平安の寺院、山本鼎の自由画なども見た。天守閣など時の支配者の遺跡が目立つ地域が多いが、ここでは民衆側の遺跡もかなり多いことが印象的である。その点で、今回訪問した無言館も興味深い。戦没美学生の作品を展示している。沖縄で戦没した方の遺作もあった。館長は水上勉の息子さんだそうだ。10年ほど以前に訪問した水上さんの若狭の展示施設も個性的で印象的であった。

外からの訪問者にもわかりやすく、歴史を多様な角度から印象づけるものが充実している点で、この地域は興味深い。

私の旅まわり（2004年10月17日）

私の各地めぐりは、最後の一県、愛媛県を残すだけとなってから、もう10年以上もたってしまった。いつか愛媛に行きたいものだ。各地をまわるのは、ほとんどが仕事である。その仕事ついでに、その周辺をまわる。

だが、学校から要請があったおりに、その学校のなかをまわることを大切にする。講演・ワークショップする会場だけに行くということにしないで、その学内・校内を、時間の余裕があるなら、校区、学校周辺をまわる。そして、そこの学生・生徒・子どもの雰囲気をつかみ、どんな人を対象に教育実践がおこなわれているかをできるだけ知ろうとする。今回の長野大学も、一時間ほどひとりで学内散策をし、学生の雰囲気、校舎・教室の様子を感じ、それをふまえてワークショップをおこなった。長野大学の印象第一は、名古屋あたりの学生と比べると、まさに質実といった感じであることであった。

時間の余裕があるときは、近くの自然・史跡などをまわる。今回は、懇親会があった別所温泉、そして上田市内を散策した。そこにはいくつかの顔が見える。一方では、真田一族に象徴される「殿様」の歴史が顔を出す。もう一方では、百姓一揆、山本鼎、上田自由大学、山本宣治、タカクラテルが顔を出す。そしてそれに北向観音などの人々の信仰の顔が出てくる。中学高校時代から、私は仏教建造物・仏像にはまってきたので、このあたりの興味はまだ残っている。今回でも印象的な塔に出会えた。

博物館などの史跡では、それらのどこに焦点をあてるのかで決定的に趣が異なり、その地域の性格が出てくる。あまり工夫されていない地域では、殿様の顔・天守閣ばかりが目立ったりするが、ここでは、それもあるにはあるが、「抵抗」「創造」の歴史もかなり顔を出して興味深かった。

もう一つ近年興味深くなってきているのは、シャッター街がなりがちな地方都市の商店街の状況に対して「町づくり」をどのように展開しているかである。温泉街ではいけば、新機軸をどう打ち出すのか、街でいけば、町並み景観保存と新しい町づくりの展開といったことになる。このあたりのことは、近年興味を覚えはじめたばかりだが、いつかコメントできるようになりたい。

金沢

2011年9月



日本生活指導学会の前日企画が、9月2日の昼時にスタートする。それに間に合わせるために、沖縄から、前日の夕方、小松空港到着の飛行機に乗る。

2日午前はフリーなので、近くの兼六園に、8時前から訪問。

朝早いためか、観光シーズン終了のためか、訪問者は少ない。

入り口で、65歳からの割引に該当するには一カ月不足であることを知る。こんな年齢になってきたのだ。





30年ぶりだが、兼六園は変わらないようだ。変わったのは、私の方だ。

開花とか、紅葉とか、雪などの目立つ光景はないが、味わいは深い。

直観的印象 武家風

休憩で立ち寄り、煎茶をいただいた建物での応対も、なぜか武家風を感じる



東京

2010年ごろまでは、ほぼ毎年出かけていたが、それ以降は、出掛けていない。

それ以前の記事も少しあるだけだ。慌ただしく会議に出席するぐらいの滞在が多いからだ。

迎賓館（2009年12月13日）

東京はかなり長く住んでいたのに迎賓館は初めてだ。テレビなどではよく見かけるが



東京日帰りの旅（2008年4月8日）

久々の東京日帰りの仕事をしてきた。日本生活指導学会理事会出席のためだ。1980年ころから90年ころまでの沖縄在住時代には、よく東京日帰りをしてきたが、最近ではほとんどなかった。いくつかのことを書こう。

1) 沖縄空港自動車道が、空港近くまで伸びたので、自宅从那覇空港まで、日曜日早朝閑散も加わって、26分ほどであった。近く最終まで完成するのだが、その時になると、有料化されるだろう。現在は、私が使用する南風原南インターから空港近くまで無料だ。その意味では、今のままがいい。

2) 早朝便のジャンボなのだが、満席に近い。かつての早朝便は、ビジネス客ばかりで、ガラガラだったが、いまは違う。

3) 便の関係もあって、会議開始までの2時間が空くので、東京駅前の書店に立ち寄る。最近の書籍購入は出張ついでに立ち寄る大規模書店でのケースが多い。アマゾンなどのネット購入もいいが、実際に手にとらないと、どうしても「あたりはずれ」がでるので、書店購入のほうがいいと思っている。

4) 昼食にレストランに入るのだが、数百円生活に慣れている私には、東京でのレストラン探しは苦労する。

5) 会議は、東京駅地下街の貸会議室。東京では、安価な会議場を見つける苦労がある。私が学会事務局長をしていた25年前もそうだった。今回の会議室は、交通の便がいいだけでなく、かなり安価なようだ。

それにしても、地下で会議するというのは、モグラ的気分がする。窓がない、というのは、会議に集中できるが、なにかいい気分ではない。

6) いろいろな点で情報が集中集積する東京での会議なので、いろいろな動向を知る。沖縄田舎暮らしには、刺激が多い。たまには、こうした情報集積の世界にでかけることはいいことだろう。それにしても、私の暮らし・仕事は、東京感覚からいえば、「世間離れ」しすぎかもしれない。

7) 帰宅は、11時過ぎた。

8) 一日4時間の会議だけなのだが、行き帰りの時間も含めて、それなりに疲れる。次の月曜日が、職場である学校の始業の日なので、朝から仕事。そのこともあって、旅の疲れがとれた感じがするのは、2日たった火曜日の今頃だ。加齢もあるだろう。

空撮 富士山 伊豆大島 (2007年12月19日)

右は、16日の午前10時、機内から撮影した富士山。



下は、同じく伊豆大島。



埼玉

埼玉もしばしば訪問しただけでなく、2年近く住んでもいた。ここでは、二つの記事を紹介しておこう。

さいたまの散歩など（2006年6月6日）

父の一周忌で、恵美子とともに岐阜に行った後、さいたまの娘婿の実家を訪問した。東海道と東北の新幹線をのりついだのだが、ビジネス客中心で、乗客構成だけでなく車内デザインもいかにもビジネス風の東海道と、多様な乗客がおり、温かみのある車内デザイン、そして観光客向けの車内紙がある東北とはずいぶん趣が異なることに気づかされた。

さいたまでは、大宮公園など広大な緑にあふれるなかでの半日の散歩を楽しませていただいた。武蔵野の面影を多分に残している地域である。縄文海進の時期には、海辺であったとのことである。このあたりの木々はとても美しく大きい。そして、自然に近い植栽に加えて、洋風庭園・和風庭園づくり、さらにハーブ通りなどもみられる。一角にある氷川神社は武蔵一宮だったとのこと、歴史も長い。休日のため、家族連れがたくさんでている。また、バラを描く一団、睡蓮やあやめ類を撮影する人々、いろいろな楽しみ方をしておられる。都市近辺のこうした公園は大変ありがたい存在である。

公園群の間に閑静な住宅が多くみられる。ゆったりした敷地に思い思いの家々が連なる。近年、ゆったりした敷地を4~5にコマ切れにして建てられた家もあり、窮屈さを感じる。そんな住宅地のなかあるベーカリーレストランで昼食。ステキな味わいを堪能した。

散歩を終えて、私は再び愛知へと向うが、JRが人身事故のためにしばらくストップ。都市の大変さを思い知らされる。沖縄玉城の生活に慣れてくると、名古屋周辺にしる、東京周辺にしる、時間感覚の違いと人口の多さに圧倒される。そして、すべて「お金」で動く世界を改めて感じる。財布の「お金」がどんどんでていく。一カ月の支出を数日でしてしまう感じである。ものの考え方感じ方も、玉城と都市とでは大きく変わってしまうのも当然である。

いまは娘夫妻が住む、愛知のもとの私たちの家が、私の「定宿」である。そして泊まった折、時間がある時には、庭の木々の剪定などをする。今回は娘婿といっしょの作業となった。木々が大きくなり競合が進む。そのなかで、当然のごとく、地元の植生が大きくなっていく。また、ヒサカキのように、知らぬ間に生えて大きくなる木もある。この庭は今後、どんな歴史を作っていくのであろうか。

愛知・岐阜・京都・埼玉の旅、そして沖縄（2005年5月17日）

今回は、5泊6日で、あちこちとまわる旅となった。

まず初日の火曜日は愛知赤池の以前の家に泊まる。われわれが引っ越した後、娘夫妻が住んでいる。娘は目下ウィーンなので、娘のパートナーと語らいである。大学教員2年目で、熱心に授業を展開している彼は、

私の良き話し相手である。私が愛した庭を彼も娘も愛してくれてとてもうれしい。彼はゴーヤとヒマワリを植えた。木々の剪定などは、まだ私の仕事として残っている。

水曜日は中京大学での授業だ。熱心で新鮮な学生たちを相手に実に楽しい授業をしている。

授業後、父の入院先の岐阜の病院に行き、泊まりの看護をする。母と義兄が交代で泊まりの看護をして大変なので、私が一日だけだが交代をつとめる。父の具合は落ち着いてきてひとまずホッとしている。看護といっても、私がいるときは、なぜだか父は自分で食事もする。私はそれを声で応援するという形だ。近く手術の予定だが、うまくいくことを祈る。

翌日の昼、別の用件のため京都に向かう。その用件をすましたあと、4月に玉城でお会いして、訪問を約束していた哲学の道近く鹿ヶ谷の安楽寺に向かう。大変素晴らしいお寺である。新緑につつまれた大文字山を借景に、美しい庭に囲まれた由緒ある浄土宗の寺である。住職夫妻と話がはずみ、いつかここでワークショップをしようかなどと盛り上がる。(ちなみに、このお寺でボランティアをしていた学生さんの実家が玉城にある。その実家の床屋さんに、今日いってくる。話していると、共通の知り合いが多い。つながりはいろいろとあるものだ。)

翌日は所用を済ませた後、埼玉に向かう。埼玉にある、娘のパートナーのご両親宅を訪問し、素晴らしいごちそうと語らいの時間を過ごす。閑静な住宅街で、とてもステキなところで、いつか近くの散策をしようということになった。

翌日からは獨協大学を会場にした、全生研の全国委員会に出席する。

今回の旅はいろいろな用件であちこちしたが、楽しい出会いが多い旅となった。少々寒かったのが予想外であった。今年も昨年のように異常気象になるのだろうか。このところ、異常気象が「通常」になってきた。

今回の旅の宿泊は、インターネットでとったが、かなり安価で、同じホテルを大手ツアーリストで予約した人よりも安かった。私などにとっては都合がいいとしても、これではツアーリストの苦戦が推察できる。航空券の予約にしても同様な事情を見うける。旅行のありようが大きく変化してきたといえよう。

昨日は、中京大学の卒業生が、カップルで沖縄旅行し、我が家に立ち寄る。近くの散策に誘う。整備中であった受水走水周辺の工事が完成した。工事のための木々がとりはらわれて、以前の鬱蒼とした感じはなくなったが、早くもとの感じにもどってほしいと思う。別の随想で書くが、沖縄の現在の住民の直接の祖先は、800～1300年くらいまえに南日本から移住してきた稲作の民であるとする説の信頼性が高まるとすると、この地は、アマミキヨ上陸伝説と結びついて、ヤハラヅカサ、浜川御嶽などともに注目されることとなるろう。

北海道

2003年12月

北海道（道東）の旅——自然編

12月10日～14日と屈斜路湖・摩周湖・阿寒湖・釧路湿原・霧多布・釧路、そして東京経由の旅をした。主目的は、12日の霧多布小学校訪問と13日の釧路生活指導研究会であるが、名古屋からの釧路直行の便がなく、女満別空港便で行くしかないこともあって、その前に、阿寒経由で個人旅行をすることにした。

観光のまったくのオフシーズンということもあって、女満別から阿寒行きの1日1便のバスの乗客はたった3名（加えて途中乗降者1名）であった。そして、湖の観光船など観光事業の多くも閉鎖中であったが、普段なら味わえないだろう出会いをすることができた。

この旅での美しい印象の第一は、摩周湖であった。湖側にそびえ立つカムイヌプリと湖は、まさに神々を感じさせる絶景であった。また、屈斜路湖でのオオハクチョウとの出会い、翌日の阿寒から釧路への道中で、タンチョウとの出会いはとても印象的だ。とくにタンチョウの翔ぶ姿の美しさ。11日朝の阿寒の気温はマイナス15度。露天風呂で風呂の岩のうえにおいておいたタオルが凍るほどであった。カナダ時代に購入したマイナス20度向けのコートが久々に活躍した。

11日朝は、阿寒湖畔の樹氷のなかを散歩する。クマ・シカがでてくるので注意という表示に多少の緊張をしながら。しかも、1時間の出会った人は一人だけで、こわいくらいである。途中、シカが樹皮を食べた樹木も多くみる。8時ころには霧で視界がなかった湖も、10時近くなると視界が広がり雄阿寒岳が美しくみえる。

そして、霧多布小学校の教員で、今回の企画に中心的役割を果たした古川さんが、開校記念日で休みとのことで、迎えにきてくれ、釧路湿原・釧路・霧多布へのドライブになる。途中タンチョウ、湿原（釧路・霧多布）展望、太平洋展望などをする。

翌12日の午後には、この地域に住む卒業生のカメラマン大坪さんに霧多布を案内してもらおう。阿寒などの山沿い地域には雪があるが、釧路や霧多布にはほとんど雪がない。湿原も、茶色の枯れ草の色でおおわれ、雪の真っ白を予想していた私の期待とずれる。緑や花々でおおわれる6～9月にもう一度こなければ、との思いを募らせる。でも、湿原に典型的な造形のヤチボウズを手触りで観察できるところまで連れていってもらったり、望遠鏡ではあるが、シカやハクチョウの姿もみせてもらう。

涙岬や、琵琶瀬展望台、アゼチ岬では、360度に近い視界で、太平洋と雌阿寒・雄阿寒だけでなく、斜里岳からはじまる知床の山々にいだかれた陸地全体を見渡せる。そして、空の青・赤・白のつくる美しさはなんともいえない。残念ながら日の出・日の入の太陽をみることはできなかったが。

快晴続きの4日間は、カナダの冬期をおもいださせてくれた。トロント周辺と比べて少々温かいが、でも乾燥気味は同じである。緯度はカナダより南なのか、空はもう少し明るい。数日前までの沖縄の海岸、そし

てヤンバルの森林との出会いとは対照的でありながら、共通して、生きた自然のなかでのかなりスピリチュアルな雰囲気を強烈に感じる時であった。

北海道（道東）の旅ー出会い編その1

さすが東の地、日が暮れるのは早く、3時30分過ぎには暮れる。阿寒湖畔のホテルでこれから散歩できる場所は、と尋ねるとアイヌコタンしかないとのこと。そこで早速でかける。

踊りがあるというが、シーズンオフで、夜の8時30分からだけとのこと。そこで木彫をしている店をいくつか回る。一軒一軒で話がはずむ。いちばん長話になったのは、コロボックルという名前の店で、四宅豊次郎さんである。かれは、1965年にすでに沖縄訪問をして、アイヌの踊りを全沖縄で見せてまわったことをはじめとして6回も沖縄訪問し、そのことの本まで出版している。

夜には再び出直して、踊りを見る。踊り手が10人くらいなのに、観衆が5人で申し訳ない。途中から舞台と観衆とのやりとりの踊り、さらに観衆も舞台にのって踊りの輪に入ったりする。こういうのは大好きなので、率先参加して楽しむ。ネパールのポカラのレストランでの踊り、そしてトロントのファーストネイション（通称インディアン）の人たちと出会ったときも同じことをした。

これらの踊りに加えて沖縄の踊りには、共通しているものを感じ、楽しませていただいた。それは、輪になっておどること、かけあっておどることに共通性があり、また踊りのリズムにも共通性があると思う。

この踊りの後、また四宅豊次郎さんの店にいき、話をはずませた。そして、アイヌにも即興の歌・踊りもあると聞く。それも共通性の一つであろう。さらに、アイヌの踊りは、踊りが神々と人々とが世界を共有するものとしてあるという。私がかかわる文化表現活動では、このようなものを追求してきたが、この神々と世界共有のテーマはまだ熟していない。このあたりを視野にいれて、いろいろと模索していきたいものだ。

北海道（道東）の旅ー出会い編その2

もう一人の出会いは、卒業生の大坪さんである。中京大学の1992年社会学部浅野ゼミのメンバーの一人である。ゼミ生が多かった学生時代にはそれほど話す時間をもてなかったが、今回かなり話しこむ。かれは教職を志望していたが、学生時代に事務の人から障害をもっていると教員になりにくいといわれて教職を断念したとのこと。今から思えば、そんなことはなかったのであるが。

そんなこともあって、もともとの希望をもっていたプロのカメラマンの道を歩み、学生時代の旅で出会ったこの地に移住してプロ生活をはじめたのだ。障害をまったくものともせず、この地で仕事をしているのだ。

この夏の全生研大会で出会った若い教員がこの地で働いているというので、長い間、消息を聞いてなかったかれのことを尋ねてみたら、彼女の学校の「心の教室」の相談員をしているとのこと、それをきっかけにこの地に訪問したいと、この地の全生研のサークルの人に声をかけたのが、今回の旅実現へと進んだのだ。かれは、二つの中学校で、「心の教室」の相談員をして、中学生（小中併置校なので、ときには小学生）から人気のある相談員になっているのだ。教職を断念したかれが、教育にかかわる仕事をしており、しかも

今はかなりの比重をかけて、写真撮影になかなか時間がとれないという。不思議な巡り合わせに感じる。でも、この湿原を中心フィールドにして撮影活動をしており、霧多布湿原の写真集を準備しているとのこと。期待したい。

北海道（道東）の旅――余話

このあたりの家々を見ながら気付いたことは、家々に塀がないことと、樹木がないことである。だから、とってもオープンな感じである。霧多布にしろ、釧路にしろ、湿原の端に、建物がならんでいるという光景である。だが、私には殺風景にもみえる。同じ北の寒冷地であるカナダの家々には塀はないが、樹木や花々がある庭がついているのが一般的である。対照的なのだ。

なぜそうなっているのだろうか、質問したところ、一つは雪対策ということだが、まだよくわからない。建物は、人々の生活のありよう、隣近所との関係のありようとおおいに関係がある。私個人は、庭が大好きであるのと、塀はつくりたくない、という考えでやってきた。この北海道の事情（この地域だけのことかもしれないが）をご存じの方がおられたら、教えてほしいものだ。

四国

2009年5月

高知

5月末、高知看護教育研究会主催で「学生を惹きつける授業プラン」というワークショップをした。

高知は、何度か行ったことがあるが、最近では、沖縄からの直行便がなくなった。福岡経由とか松山経由でいかなくてはならない。それを好機にして、日本のなかで一度もいったことのない愛媛に立ち寄ることにした。幸い、卒業生二人が愛媛で活躍している。再会することになった。



到着した翌日の朝の散歩。

まず、五台山の展望台に行き、高知の全景をみる（上写真）。山に囲まれて、いい雰囲気町だ。

高知は、1961年に修学旅行で訪問してから数回目だ。

左は、四国88ヶ所五台山竹林寺展望台の次に、すぐそばのこのお寺に行く。お遍路さんがたくさんだ。

右写真は、牧野植物園

とてもいい植物園だ。

一昨年。熊野にあって、南方熊楠にひかれたと同様に、牧野富三郎にもひかれる。

写真は、入口近くの、高知の自然を再現したところ。

いつか、ゆっくりと高知の山々をめぐるたい。



ワークショップ終了後、夕食をしたひろめ広場では土佐言葉がいっぱい。何かを尋ねると、周りの元気な女性たち＝ハチキンたちがどんどん教えてくれる。

ここはどんどん親しくなれるところのようだ。創造的なことにはどんどんノッてくるのだ。充実しすぎ？の昼間のワークショップをふくめ、いい1日だった。

上は、四万十産栗焼酎「ダバダ火振」。居酒屋で座った席の目の前にあった。珍しいので、飲んでみた。甘味があっておいしい。

後日、卒業生にうらやましがられた。めったに出会えない酒だとのこと。

右は、日曜市

近くにすんでいけば買いたくなるものが多い。

生きたアーマンを売っていたのにはビックリ。





日曜市の路を突っ切ると、高知城。そこに板垣退助像があった。

早朝は、散歩、ウォーキング、体操をする熟年の方々でいっぱい。

愛媛

高速バスで高知から松山へ

10年前の卒業生の案内で松山城へ



道後温泉の伝統ある建物

なかは庶民性溢れる市営銭湯の雰囲気

沖縄にいと、なかなか温泉に行けない。3年ぶりの温泉だ。

朝湯に浸かってから、沖縄へもどる。

香川

2005年3月

3月3日の香川大学での二つの講演・ワークショップの翌日、帰路の飛行機までの空いた時間、栗林公園を歩く。中学の修学旅行でここに来たことを思い出して、数えてみればほぼ45年ぶりの訪問ということになるが、当時の思い出は、ほとんど残っていない。

この公園は、朝早くから開園しているのがいい。2時間余り歩いた。季節柄、梅の開花以外は、雨上がりの寒空の散歩となった。それだけに人がいなくてかえっていい。すれちがう人もほとんどないなかをゆっくりとまわる。目をひいたのは、コケ類。鴨類をはじめとする鳥たち。いろいろな松。琉球支配をしていた島津家から17世紀に送られた蘇鉄の巨木も。散歩の間に、抹茶サービスを受ける。

殿様たちの豪勢な趣味ではあろうが、歴史的財産ともいえよう。すぐそばに立ち並ぶビルディングと自動車音が興ざめにさせはしたが、これだけのものは、現代では癒し効果をもたらす。

話しかわるが、讃岐はやはりうどんがうまい。うどん三昧という感じで何度も食べた。高松の町中で地元の人相手の歴史さえ感じさせる店がいい。夕方にはほとんど閉まってしまっているのが残念だった。

沖縄と高松とは夏場以外は直行便があるとのこと。帰路は、多くの沖縄への観光客と同乗することとなった。東京の大雪のあおりで、ずいぶん遅れたが。

沖縄にもどってみると、沖縄もとても寒い。今朝は7度という。信じられない。我が集落の上に位置するゴルフコースで、宮里藍さんらが出場する女子ゴルフ大会が開かれているが、寒さでふるえているようだ

鹿児島

2012年3月

京都出張帰りに鹿児島の息子家族の所に立ちよる。

3月31日、息子夫婦、孫たちとともに、鹿児島県の開聞岳に行く。最終目的地は、砂むし温泉だが、その前に周辺を回る。



開聞岳

まずは、開聞岳。飛行機から見たことは何回かあるが、地上でははじめて。美しい山だ。別名、薩摩富士だが、富士以上かもしれない。

上の写真は、近くのフラワーパークの見晴らしの丘から写したものの。

2番目は、開聞岳麓のレストラン近くから写す。手前の桜が満開。



3番目は、フラワーパーク内から写す。三者三様の美しさ。





長崎鼻

前ページ上の写真を写した場所から、南東方向には、薩摩半島南端の長崎鼻が美しく見える。

南方向の沖には、島々がかすかに見えるが、写真に鮮明には写らなかった。

フラワーパーク内の別の場所からは、大隅半島が見える（右写真）。左に突き出ているのは、指宿方向の半島。

朝方は雨がぱらついていたが、午後は晴れてきて、行楽日和。



フラワーパーク

開聞岳近くにフラワーパークがある。薩摩半島南端の温かい気候で、沖縄に似た亜熱帯植物、そして温帯の植物が混在して見られる。

チューリップが見ごろだった。



珍しい植物もある。



ヒスイカズラ





クリスマスローズを見るのは久しぶりだ。

フラワーパークでは、オオゴマダラの飼育場があった。沖縄以外では初めて見る。



さなぎが数珠つなぎだ。写真中央には、孵化したばかりのものがある。



フラワーパークの後、お目当ての砂むし温泉へ。
「山川砂むし温泉」に入る。話はしばしば聞いていたが、初体験。

変な感じだが、いい気分だ。10分～15分がメドだと言われたが、もっといたかった。海外から来た人も、楽しんでた。海岸沿いにある。眺めもいい。



思い出話

沖永良部島の鍾乳洞昇竜洞での信じられないほど楽しい思い出（2011年7月30日記事）

30日の沖縄タイムスの23面に、沖永良部島の鍾乳洞である昇竜洞の記事が掲載されていた。

13、14年前に昇竜洞を訪問した私には、信じられないほど、というか笑い話のレベルをはるかに超える楽しい思い出がある。

沖永良部高校で教育実習をする学生がいたので、実習校挨拶と研究授業参観で、島を訪問した。時間にゆとりがあったので、島見学をすることにした。前日お世話になった個人タクシーの「福タクシー」さんをお願いした。

昇竜洞の入り口は、道路より離れた下方にあったので、「受付ができたら、腕で大きな○を描いて連絡下さい」と運転手の福さんがおっしゃる。そこまで心配しなくてもいいだろう、と思ったが、確かに心配なことはすぐ分かった。

入り口で、『こんにちは』『お願いします』などと数回声をかけるが、返事がない。

しばらくすると、変わった声で返事がかえってくる。変に思って、あたりをさがすと、九官鳥を発見。鳥が返事をしていたので、困ったな、と思っていると、受付の人があらわれる。受付手続きの最後に、「出口までいったら、そこに非常電話があるので、それで無事出口に着いた、という電話をしてください」とのことだ。

入ると、人を感知して照明がつくシステムだった。連続する「笑い話」に圧倒されて、鍾乳洞のことは記憶に残っていない。ほかに入場者はいない。

なんだか怖くなって、足早に出口に向かい、非常電話で到着したことを伝えた。そこに福さんが待っていた。

こんな楽しい笑い話が連続した3時間の島内観光であった。全部書き出せば、数回連載となろう。

一つだけ、おまけ話。研究授業もおわって、実習生に空港まで送ってもらって、飛行機を待っている時のこと。私の肩を叩く人がいる。知り合いはいないのに、と思いながら、振り向くと「福さん」だ。「お世話になりました。妻が土産物屋やっているのです」といって、土産物をいただいた。

福さんとの楽しいやりとりは、思い出深い。いつか、他のたくさんのお話を書きたい。

2010年11月

知覧

息子家族の家づくりで、短い期間だが鹿児島島に出かけた。
鹿児島島訪問は、今回で10回目ぐらいか、と思う。でも知覧は行ったことがなかった。

知覧特攻平和会館とミュージアム知覧は隣接している。

平和会館は、戦没特攻隊員を中心にした展示で、沖縄の平和祈念の諸施設とは随分趣が異なっていた。特攻機の展示もあったが、製造工場として『中島』の名があったことに気付いた。私の父親が戦中の軍事徴用で働いていたところだ。映画「ホテル」にかかわる展示もあった。10年近く前に見た映画だ。

戦争の悲惨・不条理・抑圧などをどう描き、どう受け止め、どう「継承」するのか、いろいろな思いが混じり合って出てくる。

ミュージアム知覧は、知覧の歴史などが描かれる。

印象にのこったこと3つ。

1) 数千年ごとに異なる火山の大規模噴火で堆積した火山灰の地層。その間に織り込まれた人類の文化跡。自然史のなかの人類史。いずれ出会うだろう次の噴火に、人々はどう対応するのだろうか。

2) 近世期の「隠れ念仏」。薩摩の一向宗弾圧。キリシタン弾圧は知られているが、これはそれほど知られていない。それは、薩摩支配下の沖縄にも及んだ。

3) 近世薩摩の一つの支配形態としての武家の地方居住。それを観光化した武家屋敷・庭園群。

豊か、というか豪勢な屋敷・庭園だ。その美しさは、とても人工的だ。庭園木の刈り込みがそれを象徴する。独特の風情を感じるが、あまりにも人工的だ、とも感じる。

上写真は、知覧特攻平和会館。初訪問。いろいろな思いがわき出てくる。

下写真は、知覧武家屋敷庭園。美しい庭園の連続。島津藩の政策で、各地域の武士が住む。



鹿児島市内

黄砂が昨日から続く
 右は、二十年余りたっぴいそうな公園
 住宅街の端の森に接している
 孫との散歩で見つける



左は、『想』像
 鹿児島中央駅西側高台の本格的美術館の長島美術館で。
 屋外彫刻で、同じ題で二つの作品がある。印象的だ。

磯公園

初訪問だと思っていたが、数年前に訪問したことを思い出す。ここは、島津家の大庭園付き別邸。明治期にも最後の殿様が住んでいた。現在は、株式会社島津興業が管理運営しているようだ。こういうところは、県や市が運営しているところが多いが、旧大名家系列の会社が運営しているのは、





珍しいのではなからうか。

随分観光客が多い。そして、会場内も工芸品、食べ物、土産品などの店が並ぶ。縁日のような雰囲気さえ感じる。隣には尚古集成館とか薩摩切子の工場や販売店もある。いまでも島津のお殿様が『健在』といった感じを与えるほど、積極的経営だ。

この日は、太鼓ショーもあったが、一層引き立つのは、菊の展示だ。

そこで、いくつか菊を紹介しよう。



磯庭園は、桜島を借景にしている。
ちょうど桜島が噴火した。



2010年6月

吹上浜

飛行機から見える長い長い砂浜を歩く。海岸線の美しさで有名。

今日は、雨で誰もいない。いつもはにぎわうのだろう。

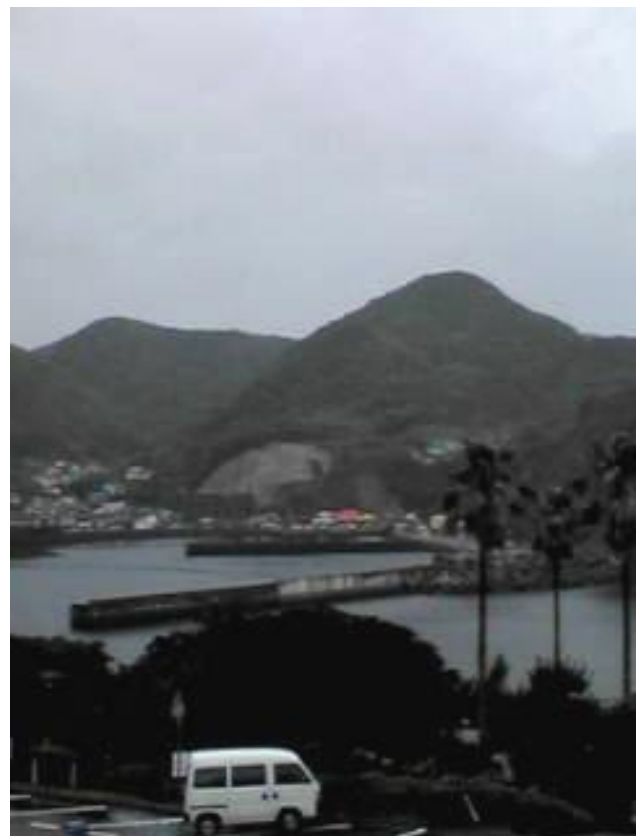
坊津の港

坊津歴史資料センター輝津館展望テラスから写す。
坊津は以前から関心があったが初訪問だ。沖縄との交流でも有名

このあたりは、リアス式海岸で、天然の良港なのだ。

だが、大型漁船に時代に入ると、隣の枕崎漁港におされたとのこと。

町おこしにいろいろと工夫している様子が、輝津館の展示からも見えた。





枕崎漁港

枕崎お魚センターから写す
これからお魚昼食をいただく

25日昼間、一人でドライブ。行く先々で、次を決めるという方式。

このあたりは、初めての訪問地ばかり。

このところの雨続きで、落ち着いた漁港に見えるが、普段は活気に満ちているのだろう。

鹿児島島の息子家族のところに滞在中、気づいたこと。

大人も子どもも人なつっこい。近所の温泉で、初めて会う6、4才の子どもが「このへんにはいっぱい温泉あるよ」と話しかけてくる。しばし会話。

昨日出かけた枕崎、坊津では、行く先々で親切に教えてくれた4人に助けられての旅。ガイドブックより、人のガイドがいい。輝津館は教えてもらって行った所

「スカイラインは、今日は霧が出るから駄目」など、帰路を地図を持ってきて教えてくれたウェイトレスおかげさまで、充実の旅

私のスロー運転にも、だれも追い越さず、ゆったりだ。恐縮した私は、脇に止まって、先に行ってもらふこと数回。

鹿児島に住む息子家族の家づくり相談に付き合う。

強烈な台風対策が念頭にある沖縄の家づくりとは全く異なる。大手住宅会社と初めて付き合うが、沖縄に何故進出しにくいかも理解できる。

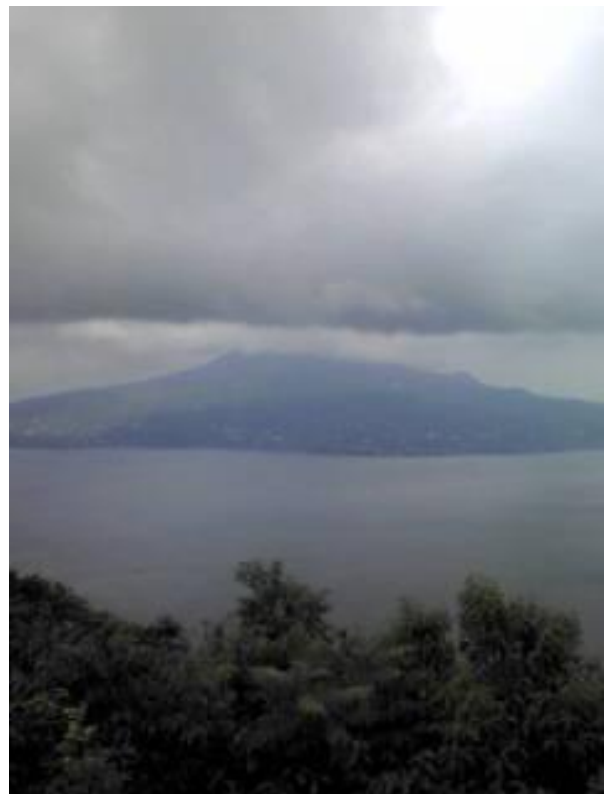
営業の違いなどいろいろとわかる。工法、部屋設計、積算の違いなど興味深い。

寺山展望台から桜島をのぞむ

知られざる絶好地。開聞岳や大隅も見えるそうだ。

鹿児島市の北部。吉野の一番奥まったところ。

鹿児島大学の研究施設に近い。





メルヘン館

孫たちと鹿児島島のメルヘン館に行く。数年前に鹿児島島訪問の際にも訪問した。

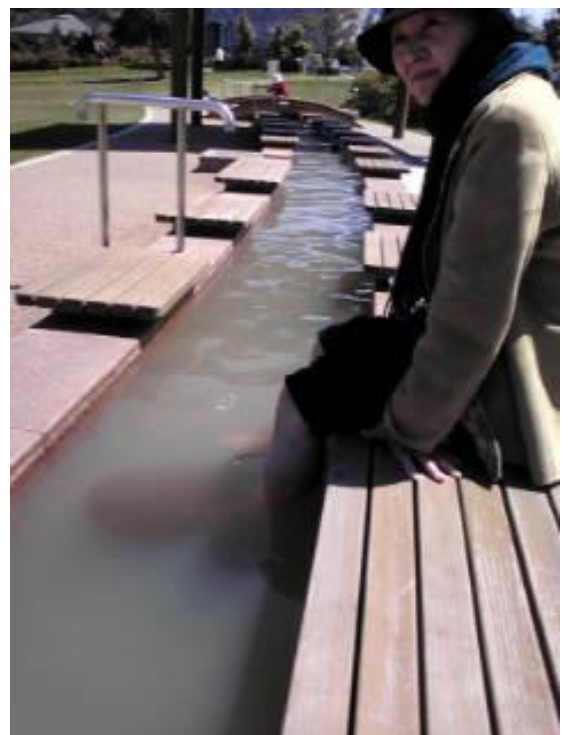
子どもが楽しむことを優先して作られている。親子連れが中心だが、児童文学に関心をもつ大人も興味を持つだろう。博物館の類いの一つの行き方だろう。

2010年3月

息子家族が鹿児島島に転居することになり、その手伝いと様子見もかねて、鹿児島島に行く。数年前の、学会での訪問以来だ。今年は降灰がすごいらしいが、20年前か30年前に鹿児島島訪問した時も、雨でもないのに、傘をさしているのを見て驚いたことがある。

桜島で足湯

桜島に出かけ、すごく長い足湯施設で楽しむ。





路面電車

バスも含め公共交通機関が整備されているし、親切だ。
ヨーロッパのトラム風電車もある

印象記

鹿児島に息子家族の引っ越し手伝いで行く。手伝うといっても、息子夫妻が作業している間、孫たちの相手をすることが中心だ。

鹿児島には、奄美、指宿、鹿児島空港周辺などすべてを合わせると、10回以上の訪問だが、鹿児島市内ということになると、5、6回目になる。これまでは、すべて、学会・研究会など仕事での訪問だが、今回はそうではない。孫たちの相手をしながら、人々の生活風景を少しばかり感じ取ることができた。いくつかメモしよう。

1) 子どもたちが人なつっこい。

引っ越したばかりの孫たちは、遊び仲間がいない。そこで、私は、孫たちを公園に連れ出す。公園には、高い金網が張ってあって、ボールが飛び出さないから、サッカーや野球を楽しめる。そこでは、10人を超す男の子たちがサッカーをしていた。引っ越ししたばかりで、友達がいないので、一緒に遊んでねと頼む。頼んでいる間に、今度3年生と1年生になる孫が、恥ずかしさのためか、家にもどってしまう。そこで、みんなで呼びに行くという。でも、それじゃびっくりしてしまうので、『代表』4人ぐらいが行くことになる。ということで、仲間ができた。事のついでに、元サッカー選手の息子も、サッカーに合流。めでたく孫たちは、近所の男の子たちと遊べるようになる。翌朝直ちに遊びの誘いがある。

4歳の孫娘も、公園に行く。2回目に行った折だ。ブランコをしていると、近くに住むらしい8歳と6歳の姉妹がくる。「一緒にブランコしてね」と頼むと快く遊んでくれる。ブランコをしあったりして、楽しむ。その時、上の孫たちは滑り台で遊んでいた。かなり創意的に遊んでいる。そこに、孫娘と姉妹の上の子も合流する。4人で「ひっちゃかめっちゃか」の滑り台遊びになる。

私の息子・娘が、7歳、4歳の時、埼玉に引っ越したが、その時も私が彼らをつれて、友達発見の『散歩』をしたので、まったく同じことになった。それにしても、ここの子どもたちは優しく親切だ。

子どもたちだけでなく、大人たちも、人懐っこく、親切な人が多いなと感じた。

2) 公共交通機関が発達している。

バスも路面電車もよく整備されている。街中に出かけるのにも都合がいい。安全も大切にしているようだ。バスなどは、乗り込んだ客が座るまで発車しない。

1日乗車券600円はなかなかいい。

3) 桜島は、灰が大変だが、景色もいいし、楽しめるところだ。

孫二人を連れて桜島に行く。恐竜公園では、孫たちは興奮して帰りたがらない。楽しめたものだから、恵美子のたつての希望で、私たち二人だけでもう一度行く。その時、爆発に出会った。

噴煙は、見ている分にはいいが、風向きによっては、自分たちの方に向かってくる。目がかゆくなり、のどがいがっぽくなる。何度もうがいと目洗いが必要になった。

2007年7月

奄美から伊平屋への島々の空撮



空撮を試みた。上上写真中央が、奄美市名瀬の市街地だ。

奄美大島へは、飛行機の乗り継ぎの時間に北部を少しまわっただけである。いつか時間をかけて滞在したい。

加計呂麻島

加計呂麻島（左写真）も行ってみたい。

徳之島

沖永良部や与論も写真にとったが、写りがよくないし、奄美群島で私がまだ行ったことのない徳之島であるので、掲載する。



伊平屋島



10年近く前に訪問したことがある。美しい島だ。

2005年10月

鹿児島の旅

鹿児島大学教育学部で開かれた日本教育方法学会のおりに、飛行機便の都合で時間があり鹿児島を散策した。いくつかの感想。

1) 20年ぶりになるだろうかの鹿児島。空港から市内まで10分おきにあるバスで40分あまりとすごく便利になった。1971年はじめて沖縄に行く途中、できたてといった感じの鹿児島空港で乗り換えたことを思い出す。

2) 朝早く城山にタクシーで行き、散策しながら下る。途中薩摩義士の墓をみる。幕府が「薩摩いじめ」として命じた木曾長良揖斐の三川分流工事が行なわれた輪中地帯に生まれた私にとっては、深いつながりである。と同時に、その工事が抱えた薩摩藩の財政危機を打開すべく沖縄からの収奪・搾取を行なったが、その沖縄に住んでいる私。そんな視角から、私は鹿児島に関心をもってきた。

3) 市内中心部にこうした広大な自然林の散策路が残されている。貴重なことだ。理由は調べていないが、大名は城をこの城山の上ではなく麓に築き、しかも天守閣をつくっていない。興味あることである。

4) 月曜日とあって美術館博物館などが休みであったが、朝早くから空いていた照国神社の展示施設を訪れた。島津の大名が早くから富国強兵殖産興業路線に踏み込んだ状況が示されていた。まさに上からの近代国家づくりである。その薩摩出身者が明治政府の担い手のかなり主要部分を取り、政策が継承展開されていたのである。

5) 一番楽しんだのは、かごしま近代文学館・かごしまメルヘン館であった。20年近く前に訪問した折には、観光施設などでは島津と明治維新を誇るという調子のものの多さに圧倒されたのだが、それらとは異なるものをここにみた。7年前にスタートした新しい施設である。文学館では鹿児島にゆかりのある作家たちのものが提示されていた。奄美と深いつながりのある島尾敏雄にもっとも興味を感じた。

6) メルヘン館が特徴的なものである。子どもたちがメルヘンを楽しめるような映像をはじめとする多様なディスプレイが行なわれていた。興味を感じたので、受け付けの方にこの館のコンセプトなどをうかがったら、館の次長さんから説明を受けることになった。椋鳩十が一つのきっかけになっているようだ。そして、かなりの数の訪問者がおられ、親子読書コーナーなどもかなり活用されているようだ。子どもにとってこれだけの親しみやすい施設であれば、なるほどと思う。

今後の発展を願うものである。評価が固まったメルヘンを中心につくられているが、創造過程にあるものへと開き、また子ども自身が、あるいは大人たちが共同創造に参加するものへと発展していくことを願う。多分そうした方向でいろいろな企画が行なわれていると推察はするが。

最近各地でつくられる美術館博物館は、かつてのように権威にあふれつつ、ときに「黴臭さ」を感じさせるものとは異なって、このように親しみやすいものへと変貌しつつある。8月おわりに息子家族たちと訪れた宮崎の博物館もそうである。沖縄の未来ゾーンもそうした志向をもっている。こうした施設が斬新な商品展示・パフォーマンス型ということではなく、利用者の参加による共同創造型の施設へと大きく発展していくことを願うものである。

九州

北九州 2008年9月

北九州大学で開かれた日本生活指導学会大会に参加。その前後のいくつかのエピソードだ。
北九州のホテルについてカバンを開けてびっくり。私のではない。慌てて航空会社に問い合わせる。
大騒動のあと、無事交換。とてもラッキー。不幸中の幸い。おおぼかだった
相手の方と、沖縄話で少々盛り上がる。チンスコーを差し上げる



小倉城へ朝の散歩
ホテルから十分

12師団司令部跡

沖縄兵士がヤマトグチ使用下手でいじめられ、
苦勞したことを思い出した





旦過市場。
市民に愛されてきたという。
朝早いので開店前。
それでも魚の匂いがいっぱい。

北九州で活躍する卒業生との久しぶりの再会。

一緒にまるわまえラーメンをいただく。

50年続く小倉名物だそうだ。



長崎

2006年8月

「琵琶湖・佐世保・長崎の旅（2006年8月11日）」の佐世保・長崎の個所

佐世保・長崎は、なにかと所用があつて2、3年に一度は訪れている。10数年前、佐世保は沈んだ町の雰囲気であったが、最近は元気さを感じさせてくれる。かつて訪れた針尾島も、今はハウステンボスをもつ観光地である。そのハウステンボスが経営不振とのことである。長崎には、しばしば勢いの良さを感じるが、今後どうなっていくのであろうか。夕張のようにならなければよいと思うが。

佐世保では、20年近くぶりに卒業生4名に会った。皆さん、教育現場の大変さのなかを、たくましく、

ないしは、したたかに実践していることが感じられた。豊かな感性をもって、子どもたちが伸びやかに育つような志向性を強くもっている。学生時代のひたむきさをそのままもって、豊かに経験を蓄積しながら、実践展開していると感じられた。全員、ワークショップに参加して、その実力を発揮しておられたが、久しぶりに私の「実践」に出会って、学生時代にこんなことをしてきたのだ、というふりかえりをもっておられた。無論、20年の開きはあるのだが。

午前中の時間が空いたので、一人の卒業生にお願いして、夭折した卒業生のお宅を訪ね、霊前に挨拶をした。そこで、お母さんとかなり話をし、いろいろな思いを交わしあった。そして、忘れがたい場を訪問し、彼女のことを思った。彼女は、生活指導学会創設時代、私が事務局長をしている折に、アルバイトとしてこれらの業務などを手伝ってもらった。

佐世保、長崎間はJRを使ったが、意外に時間がかかる。佐世保と博多の方が短時間のこともあるという。この二つの地にある県立大学が、公立大学法人として統合して新たに出発する時期に訪問することになったのである。かなり異質なものをもつ両大学が統合によって、より豊かになっていくことを願う。

長崎でのワークショップは、ちょうど原爆記念日であり、ワークショップ準備作業中、職員の方々と黙祷をともにした。ワークショップの前後には懇親会などもあり、多くの先生方と懇談したが、新たな大学創造の息吹を感じるが多かった。難題はあろうが、前向きの論議・取り組みがある点で、いまどきの大学のなかでは、かなり積極的な位置にある。片方の長崎シーボルト大学でワークショップを行ったが、終了後の学内見学ツアーに加わり、素晴らしい施設に圧倒されてしまう。施設だけでなく、先生方の積極性に頭が下がる思いである。もう一つの佐世保にある長崎県立大学は歴史も長く、先生方の教育実践の取り組みにかなりの蓄積を感じさせられた。実践報告なども、実際の授業改善を反映している。経済系でこれだけの蓄積のあるところは少ないだろう。大都市の経済系だと、学生たちの何割が大学にいるだろうか、という状況だが、この大学では、キャンパス内で学生たちが熱心に多様な活動を展開しているとのことだ。一度訪問してみたいと思う。

帰路は、航空便の都合で福岡空港経由になったので、博多に所用のある先生に送っていただいた。異分野の先生との語らひは新鮮なことが多く、楽しい帰路となった。

宮崎 2006年7月

三泊四日で、夫婦で息子家族がいる宮崎に行く。三人目の孫には、生後一カ月に会って以来、ご無沙汰している。「いっしょにマイル」という、大変格安な費用で行く旅である。宮崎空港の航空券がとれなかったので、鹿児島空港経由でいく。台風が心配であったが、うまく「切り抜け」、覚悟していた雨さえほとんどあわないラッキーな旅となった。

息子夫婦は、三人の幼子をしっかりと立派に子育てしていて、感心する。若手研究者である息子は、子育てで参加もしつつ、研究上もいろいろと大変だが、立派にやっている。もう2~3年前から、私と息子とはお互いに励まし合う関係となっている。恵美子は、若夫婦に彼女式のマッサージをしたりしている。そして、孫遊びがかなりうまい。私もそれなりにしているが、なぜか長時間はできなくなっている。息子夫婦はうま

く協力しあって、この世代では今や珍しくなった3人の子育てに奮闘している。3人の子どもと夫婦の光景は見ていて立派だし、楽しい。その家族に私たちが加わると、総計7人となり、結構な集まりとなる。3人の孫は各々独自性があるとおもしろい。

鹿児島空港で7人乗りのレンタカーを借り、久しぶりに長距離高速道路運転で宮崎に行き、翌日は、みんなでえびの高原で一泊したが、他に綾、飫肥などを訪れる。孫たちのペースを中心にした旅であるが、それが結構楽しい。孫たちと遊び、息子夫婦と語り、いろいろ充実した旅となった。

宮崎は、美しい自然がかなり残っている。その割に訪問客は少ない。かつての新婚旅行のメッカはどこに行っただかの観さえする。観光地の施設も閉鎖になったところをしばしば目にする。旅先で、末孫のミルク購入では一騒動。なかなか見つからない。みつかったと思ったら夕方6時に閉店という具合で、2時間近く騒動。お蔭様で、桜島が見えるところまで行ってしまう「おまけ旅」まであった。こうやってみていると、沖縄は田舎でも結構人間があふれていると思う。

宮崎でも綾のようにいろいろと奮闘しているところがある。そんな一つのレストランを訪ねたり、地元産品を購入したりもした。そして、息子の研究は、私と専攻分野が全く異なるが、エコロジカルかつ地域起こしにつながるもので、今後の展開に期待したい。

2005年10月

私の旅風景

この10月は旅がとても多い。11回の飛行機乗りで、半月は自宅以外の滞在である。偶然がかさなったことも確かだが、こんなハード日程は今回でおしまいになろう。

それにしても、3、4年前ならこんな日程では体調を崩すにきまっていたが、今回は結構もっている。それだけ体調が回復、というよりも、私の感覚でいえば、生まれてこのかた最高の体調になっていることを示しているのだろう。それも定職をやめて、沖縄の田舎でゆったりと自然とともに暮らす生活のお蔭であろう。

つけくわえると、愛知にでかける際には、今は娘夫妻が住んでいる、元の私たちの家に泊まれること、そしてその折に日程の都合よく、ヨガに参加できることもある。

私の旅姿を紹介しておこう。ここ数年ほぼ変わらない。一週間近くの日程であろうと、バックパッカーの姿である。7、8年前頻りにトロントにでかけたときもその姿で、空港で荷物を預けることはめったになかった。旅先で必要な資料を2～3ファイル箱に入れ、衣類を少々つめ、本2～3冊とメモ帳だけというスタイルである。フォーマルな衣類が必要な場合もリュックにつめこむ。これがとても楽な旅姿である。

以前は旅の途中でも、原稿書きなどかなり仕事をしていたが、このごろは、旅の合間は結構ゆったりして、ストレスをためないようにしている。それでも、帰宅して一日はゆっくりとした休憩をとることにしている。飛行機というのは結構疲れるものだと思う。

また、以前はせっかくでかけるのだから、旅先の名所旧跡などをまわろうとしたが、いまでは、とくに興

味深いことがあるとき、あまりにも時間があまっているときに、ゆったりとしたペースでそうしたことをすることにしている。

旅で困るのは、多くの場合、排気ガスにさらされることが多いことである。呼吸器に敏感な私は、排気ガスにすぐに反応し、鼻がむずがゆくなる。そこで帰宅後、長年続いている鼻うがいとなる。アロエ汁・でがらしお茶・塩を混ぜたものでの鼻うがいである。これをすれば、たいていはうまくいく。かつては旅先にまで持参したが、今はすごく調子がいいので、帰宅後にやることで対応できる。

今回の旅は6泊であったが、生まれたばかりの三番目の孫に会う日程もくみこんだので、結構楽しんだ。宮崎にいる息子夫婦の三番目の子どもである。息子カップルは結構うまく子育てをしている。三番目にもなると、経験の豊かさがものを言っているようだ。

その帰り宮崎空港で、卒業生がそこで働いているのを突然思い出す。10年ぶりくらいの再会である。学生時代のおとなしめの性格を維持しつつ、活躍しているようだ。こんな風に卒業生に会うのも結構楽しい。今回の旅の最初の日程の長崎では、卒業生たちもかなりの活躍をしていた。こうして、各地で卒業生たちが活躍しているのを見るのも楽しい。10年に一回くらい会うのがちょうどいいのだろうか。

旅にメモ帳をもっていくのは、旅でのいろいろな出会いが豊かな発想をもたらしてくれるので、それをメモするためだ。そしてその多くはこのホームページの随想欄に書く。あるいは、ワークショッププランとなって生きてくる。今回も長旅なので、随想欄に書くことがたまっている。

付録

ウィーン・ドレスデン

※ 海外の旅だが、別個に、台湾・バリ、フィンランドとしてまとめたので、残ってしまったウィーン・ドレスデンの旅をここに掲載することにする。

2005年3～4月

3月28日出発

3月29日～4月1日 ウィーン

1日～4日 ドレスデン

4日～5日 ウィーン

6日 帰着

という旅を二人でしてきた。

ウィーン大学で交換留学している娘訪問と、ドレスデンにいる旧友訪問とを兼ねて、かなり観光もした旅であった。4年ぶりの海外旅行である。この旅は、航空券とホテルを予約しただけで、滞在中については、これまでの私には珍しく？事前の計画なしの旅であり、それだけに新鮮さを増すものとなった。

ウィーンはオーストリアの首都でありご存じの方が多であろうが、ドレスデンはご存じない方が多いだろう。ベルリン——ドレスデン——プラハ——ウィーンが、北北西—南南東に等間隔に並んでいる感じである。ウィーンとドレスデンはプロペラ飛行機で1時間余りの距離。50人乗りで、久々のプロペラ機搭乗である。なお、帰路の飛行機は、ライプツィヒ経由のウィーン行きだったので、上空から陶器の町マイセンを近くにみることができた。

まずは旅の概観だ。

旅中は、雨なしで天候に恵まれた。気温は、いずれの都市も昼夜の温度差は激しいが0～20度の間で、寒さ嫌いになっている私たちにはラッキーであった。新芽がふきだすちょっと前といった感じであったが、クロッカス、レンギョウ、サンシュユ、モクレン、パンジーの開花など、春を感じさせるものを目にすることができた。また、内陸部ではあるが、近くを大きな川が流れているせいか、トロントほど乾燥して、助かった。

ウィーンでは、3年ほどドイツに滞在していた若い友人もいっしょになり、ずいぶんお世話になった。娘や彼女のお蔭で、公共交通機関の乗り方、レストランのメニューなどをはじめとして、現地での対応で楽をさせていただいた。ドイツ語をまったく知らない私は、時々英語で対応した。ただ、ドレスデンでは、英語の通用範囲が狭く、店では筆談で価格を知ることもあった。ドレスデンでは、旧友のお宅に3泊させていただき、久々の英語使用となった。

オーストリア航空は、とても明るい赤を基調にした色を使用している。アテンダントの制服もそうだ。ウィーンではこの色があちこちで使用されていた。派手という感じではなく、とても好感のもてる色使いであった。

ウィーンでは二つのホテルに計4泊した。オフシーズンのせいか、5つ星・4つ星であるが、東京のホテルよりずっと安く、ツインの朝食付きで13000～16000円台であった。いずれも100年以上の歴史をもつ建物であり、部屋も広く居心地のいい生活をおくらせていただいた。その一つのドゥ・フランスは、日本の帝国ホテルのように、戦後の4ヶ国共同統治時代にフランスの本部が置かれたところであった。

人々との出会い

今回の旅では、娘も含めて、平均して20代後半との出会いだった。みんなチャレンジングで創造的な生き方をしている人ばかりで、圧倒される感じであった。

ウィーン大学の日本学科で研究している若い人にも出会う。なんと彼女の日本滞在中の指導教員は、私の知人であった。戦後日本の生活・教育などを論文にする人たちがいるとのこと。

また、兵役拒否の代わりに、広島原爆資料館で社会サービを行う人もいるという。大変興味深い話だ。沖縄にも平和祈念資料館などあるから、沖縄に来たらと話したら、政府指定なので、それは難しいとのことだ。

ドレスデンの知人は、彼氏の方は工場の技術開発部門で働き、彼女の方は夏の出産準備をしながら、いま、ヨガの指導活動を展開している。私たちといっしょに四人で、ヨガを行う。ちなみに、往復のオーストリア航空の機内音楽には、瞑想・ヒーリングチャンネルがあって、落ち着かせていただいた。

かれらは、長寿の沖縄の生活・食事などを紹介する英文の分厚い本を愛読している。そんなこともあって、将来は、沖縄でレストランを開こうかなどと、沖縄の話で盛り上がる。この二人は、これまでも2～3ヶ国での生活を経由して、ここドイツにきている。そんなかれらが、沖縄にくるなどというのも楽しい話だ。

3歳になる知人の子どもは、母語が異なる両親の言語と、それに英語の三カ国語を使う。これにドイツ語が加わるとどうなるのだろうか。この三カ国語の切り換えが大変スムーズなので、興味深い。

人々の暮らし

ウィーンでは、人々が早足で歩く。公共交通機関が密集し、ビジネス街や大学街の近くをまわったので、特別にそう感じさせられたのだろうか。

両都市ともに、公共交通機関、とくに路面電車が健在で、ウィーンでは一週間フリーパスで、あちこちをまわることができた。日本での公共交通機関の再活躍を期待したいものだ。公共交通機関には改札がない。時々検札があり、切符を所持していないと、高額支払うとのことだが、空港から市内への鉄道で出会った以外は、検札には出会わなかった。

切符の買い方は慣れないと難しい。タッチパネルで買うところがあったが、わからず隣の人に尋ねたりした。駅員が減多にいないのだ。

市街地近くに一戸建ては見当たらない。ホテルのウィーン案内書によると、ウィーンの人々の50%はアパート暮らしだとのこと。

ウィーンも各地の人々が集まる多文化的側面があるとは聞いていたが、トロントにいた私からみると、比較にならず、圧倒的にドイツ語とコーケイジアンたちで占められていた。そのなかで、多様な地域の食料品が売られているナッシュマルクト通りは、異彩を放っている。中近東やアジアの食料品が多様に並んでおり、ドラゴンフルーツまであった。

楽しかったのは、ドレスデンの土曜日にエルベ河岸の広場で開かれるフリーマーケットだ。100メートル×300メートルくらいの広さだろうか。そこに何百、いや千以上あろうか、多様な物を売っている。電機器具、音響機器、おもちゃなども含めて木工品、古切手、古銭、衣類、陶器、ガラス製品、古本……。

面白かったのは東独時代のものだろう軍服や勲章。ヒットラーやホーネッカーの写真や本まである。ナチス政権、東独政権下の歴史を感じさせる。なぜか、歯医者医療器具まで売っていた。それらは実際に使用可能なもので、歯科医療関係者が品定めをしていた。

店を出しているのは、中高年齢層が多かった。子どもの店番もあったが。

ドレスデンは、戦争末期、米英軍の空襲で中心部の大半が破壊され、多くの死者をだしたところだ。経済「停滞」状況にある近年のドイツのなかでは、急激な工業発展がみられるところだ。自動車・半導体などの産業だ。そんなことで、知人の子どもも通うインターナショナルスクールは、急激に児童数増加となっているとのこと。

空襲で破壊されたなかでシンボリックに位置にあるが、フラウエン教会で、広島原爆ドームと同様に祈念的なものとして残されてきたが、つい最近ドレスデン800年にもかかわって、復元されたという。瓦礫となったレンガももとの位置に生かしたという。

ドレスデンの中心街の大壁画の一つは東独時代の労働賛美らしきもので、なぜか「なつかしさ」さえ感じさせるものであった。また、800年の歴史をもつドレスデンの歴代王を描いた長さ数十メートルのタイル絵は、マイセン制作のものだという。その絵には女性が一切登場しない。ウィーン大学の胸像でもそうだが、近年まで男性中心社会が圧倒的であったことを示唆していよう。

有機食品への関心も高そうだ。ドレスデンで一回、有機食品専門のレストランにはいった。スーパーなどでも、BIOという表示のあるものをかなり見出せた。これが有機食品の表示であり、日本でバイオという

と、別の、あるいは逆の意味になるのが不思議に感じられた。

ドレスデンでは、日曜日はほぼ完全に店も閉まり、きわめて限られた観光向けの店だけがあいているとのこと。24時間店があく「便利さ」になれている日本の状況に問題提起をしているとさえ感じさせた。

王宮近くの公園で、子どもが無意識にラップスイセンの花をつんだことで、おばあさんのお叱りをうけた。景観・環境を守ること、子どものしつけにかかわっての伝統的な「力」を感じさせる場面だった。

景観

航空機から見ると、都市地区を除けば、このあたりは、広大な畑があり、その間に森が所々にあるという感じである。一部の山岳地帯を除けば、なだらかな丘陵地帯で、丘の上まで畑である。森は広々とした丘陵の間を駆けぬける谷や川の周辺にあるといった感じであるので、高所に森がある日本の感覚とは異なる。

ドレスデン近くの空からの景観で気づいたことの一つは、マイセンの陶器制作のための陶土の掘り出し中の場、掘り出したあととみられる場をたくさんみいだしたことだ。瀬戸よりも多くの地点があると感じた。気づいたもう一つは、風力発電施設の多さである。空から見ると、いつもどこかに見出せるほどであった。さすが環境問題に敏感なドイツと感じた。

歴史の書籍だけでしか知らないドナウ川とエルベ川を見た。ドナウ川は、娘の寄宿舎の近くを流れる。エルベ川は、ドレスデンの友人の家近くを流れる。双方とももっと大河を予想していたが、中流であるせいか案外小さく、私の生まれた家の近くの長良川や木曾川と同じくらいであった。エルベ川は、雪解け水のためか、流れがとても早く、ゆっくりとした自転車くらいの速度はあった。観光船が走っているが、よくぞ上流向きにすすめるなあと感心するほどであった。

ドレスデンの景観地では、もう一つラーデボウルという、丘の上のビアガーデンでドレスデン全景を見渡せる所にいった。ぶどう畑の急坂の階段300～500段のぼったところにある。その近くに蒸気機関車はしっているのに出会った。小さなローカル線のようなのだが、日本の観光用ではなく、実際に使用されているのである。

ウィーン・ドレスデンとも、100～200年の歴史のある5～10階建ての石造建築が多い。それは他のヨーロッパ地域同様、大きな財産の蓄積ともいえよう。

観光

ウィーンは、日本でいうと、京都という感じである。人口も百数十万であり、ハプスブルグ王朝などによるかなりの歴史をもっている。京都の方が歴史的に長いのだが。その観光スポットには王宮施設、教会がある点でも類似している。

しかし、京都の寺院の観光的比重がかなり高くなっているのに比べれば、観光的に著名なものでも宗教機関としての機能がなおかなりの比重を占める。ある著名な教会では、告別のミサのため、入り口周辺より中に入るができなかった。それにしても、かなりの金をかけた建築で、ゴシックとかバロックとかいわれる建築様式の代表的なものが多い。

ウィーン大学は、市街地のなかに普通のビル同様に、各学部・研究機関などが立ち並ぶ大学である。本部？建物の中庭には、著名な教授たちの胸像が並んでいる。特徴は全員男性であること、そして19世紀から20世紀半ばにかけてのものが多く、その時期に世界的にみてかなり枢要な位置を占める時期があったことを反映している。そして、現在も膨大な学生数をもつ巨大な大学で、とてもにぎわいをみせている。

歩きながら、私と同業者の大学教員らしき人はすぐ目につく。どこでも大学教員は一見してわかる風情なのだろうか。

日本で「ウィーンに行く」というと、音楽に関心をもってと思われるが、私たちはそうではなかった。しかし、市立公園を散歩すると、ヨハン・シュトラウスの胸像があったり、オペラ劇場など「音楽」に出会うことも多い。娘の寄宿舎の近くは、ベートーベン記念のものが多い。そこで「ベートーベンの散歩道」を歩く。その突き当たりから先はぶどう畑であった。ウィーンの街全体では日本人も含めて東洋人にあうことはきわめて少ないが、その近くにあるベートーベンの家を訪問するのは、圧倒的に日本人である。

ウィーンまできて音楽鑑賞の機会をもたないで帰るわけにはいかないということで、最後の夜、フォルクスオーパーでミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」を鑑賞した。並びの当日券で手に入れられたのは、舞台の袖でオーケストラ横のバルコニー席であった。そのボックスは5人収容だが、その後部なので、舞台がよくみえない席である。それでも音楽主体なので、よく聞こえるからいい、ということで席をとった。かつては、名家の人々の家族席かなにかで、その付け人の席をとったというわけだ。英語の字幕がでるのだが、めがねをもっていかなかったので読むことはできなかった。

ともかくも、「サウンド・オブ・ミュージック」「マリア」「ドレミの歌」などの音楽を堪能させていただいた。このミュージカルの舞台はオーストリアのザルツブルグであるのだが、長くオーストリアでは上演されず、今回がはじめてということだ。全体がアメリカ調なので、それをどうオーストリア調にするか、ということがあったのだろうが、この分野に未熟な私にはよくつかめなかった。

広大なシェーンブルグ宮殿は離宮であり、ベルサイユ宮殿に匹敵するものをつくらうとしたハプスブルグ王朝の意思を感じさせるものだった。幾何学的につくられた庭園、きらびやかな建物・内装などが印象的である。今は季節でないのが残念だが、緑の季節の写真をみると、緑に囲まれたすばらしい庭園だろう。

博物館・美術館は両都市とも歴史があるだけに多い。ウィーンのアムステルダム博物館では、ブリューゲルの絵が印象的であった。人々の生活ぶりを躍動的に描いている。当時の子どもたちの多様な遊びぶりも描いている

が、馬乗りなど、私たちのまわりでもつい最近まで見られたものが多く登場していて興味深い。アリエスの「子どもの誕生」で述べられていることを実感する機会でもあった。

ウィーンでもう一つ訪問したのは、リヒテンシュタイン美術館で、天井画がすごい。描かれた建物は立体的に感じられ、人物もいまもとび出してきそうな感じである。また、信じられないほどの装飾をほどこし、超巨大な家具を見ることができた。

最後の日、飛行機搭乗まで時間があつたので、訪問したのはホテルすぐそばのプロイト博物館である。人物を扱う博物館としてはよく整備されており、本格的にフロイトを学ぼうとする人には喜ばれるものだろう。フロイトが長く診療活動・生活をしていた建物をそのまま活用して博物館にしている。今日の日本でいうと、自宅兼診療所になっている大きなクリニックといった感じである。

食事・散歩など

行きの航空機では日本人観光客が大半を占めたが、帰りでは、かなりのビジネスの人など日本人以外の人もいた。ドレスデン往復は、圧倒的にビジネスの人が多く観光客は稀だし、日本人は私たち以外はいなかった。

レストランなどでの食事は、出てくる量が圧倒的に多い。1. 7人前という感じで、レストランでの食事となった最初の数日間で、2キロくらい太ったようだ。一回、ウィーンの町外れの中華料理店で食べたが、トロントでは全く中国風にでてくるが、ここではドイツ風にでてくる。4人で食べたが、多いと予測して3人前をとったが、それでもたべきれない量であった。その晩は、われわれだけが客であったが、のんびりした対応であったことが印象的だった。

私はソーセージをほとんど食べてこなかった。しかし、もともとベジタリアンに近かった知人さえ、このソーセージはおいしいので、例外扱いをしているという。食べてみると、たしかにおいしい。

レストランやカフェの値段は、日本よりやや安目といった感じである。トロントが日本の半額近くの間をうけたが、それと比べると、かなり高めである。しかし、スーパーなどの日用品は、もう少し安目で、日本の2/3ぐらいだろうか。

滞在中、ウィーン市内を含めて、いろいろと散歩したが、もっとも印象的だったのは、二回のエルベ河岸の早朝散歩だった。広い河岸も、夜明け時には、私の他には自転車・ジョギング・犬の散歩の人が一人いるかないかくらいであった。崖状の対岸には、三つの美しい城、別荘地的な家並み、ぶどう畑、森が並んでいる。最近、ユネスコの世界遺産に登録されたとのこと。昼間、観光バスが頻繁にとまるどころだ。

そこで朝の空気を吸い、日々の私の体操をし、日の出を見る、なんとぜいたくなことだろう。早朝は、河岸は氷がはるほどの寒さだが、それがかえっていい。

この河岸からすぐそばには、100年以上の歴史のあるバルドパーク（森公園）があり、そこの散歩もとてもいい。その周辺はかつては別荘地であったようだ。その建物をそのまま活用した公立小学校もあり、また先に紹介したインターナショナルスクールもそうだ。学校くさくない建物で、楽しい雰囲気をかもしだしている。週末で学校のなかには入れなかったのが残念だ。公園のなかに、学校の遊び場をつくり、活用しているのもいい。

みやげ物などの買い物は、ドレスデンのヒルトンホテルでの木工品とマイセンの陶器をのぞけば、地元のスーパーや露店などでのものだった。地元の人が空港などで買うよりずっといいとのすすめたのでそうした。沖縄でもそう思う。人々の生活に即したものがみやげ物として、とてもいいと思う。チーズやハーブティーなどを買う。

陶器で世界的に著名なマイセンは、ドレスデンの隣町という感じである。また、おもちゃなどの木工品もドレスデン近くでつくられている。炭鉱閉山に伴い、労働者たちが木工品制作をはじめたという。ともかくドイツは職人芸が盛んなようだ。先のフリーマーケットでもそうした品々を多くみた。

金銭のことでいうと、ウィーンではクレジットカードを使用することが多かったが、ドレスデンでは使用できる場所はきわめて限られており、急遽ユーロを下ろすこともあった。週末だったので、下ろす場も限られていた。